

殿 久 遺 跡

2016

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

との 殿 きゅう 久 い 遺 せき 跡

2016

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、美祿市伊佐町伊佐字殿久地内での中山間地域総合整備事業による農地区画整理工事に先立ち、山口県美祿農林事務所及び山口県教育委員会から委託を受けて、同地内に所在する殿久遺跡において公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図りながら記録保存をすることとしております。

このたびの調査では、建物跡や生活物等を廃棄した穴である土坑などの土地に残された生活の跡とともに、日常の炊事・食事に使用した土器や中国から輸入された青磁と呼ばれる磁器片などの生活遺物が見つかり、室町時代頃に集落が広がっていたことがわかりました。このほか、縄文時代に狩猟で使用された石鏃も発見されました。

美祿市内でのこの地域における初めての本格的発掘調査であり、新たな調査成果により、美祿地域と宇部地域を結ぶ山間地での交通の要衝としてのこの地域の歴史を知る上で数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通し、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に愛着をさらにもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人山口県ひとづくり財団

理事長 松永貞昭

例言

- 1 本書は、平成27年度に実施した^{とのけい い せき}殿久遺跡（^{みね い さし い さ とのけい}山口県美祢市伊佐町伊佐字殿久地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県美祢農林事務所の委託〔契約名：中山間地域総合整備事業 美祢地区 平成27年度埋蔵文化財発掘調査業務〕及び山口県教育委員会の委託〔契約名：平成27年度中山間地域総合整備事業 美祢地区 に伴う殿久遺跡発掘調査業務〕を受けて実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター		
調査担当	事業第一課長	上山 佳彦	
	文化財専門員	水津 亜希子	
	調査員	河村 美沙	
- 4 本書の第1図は、山口県美祢農林事務所提供の地図を複製使用（一部修正）した。第2図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「山口」・「小郡」・「西市」・「厚狭」を複製使用（一部修正）した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示している。標高は、海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帖」Munsell方式による。
- 7 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SB	: 掘立柱建物	SK	: 土坑	SD	: 溝	SP	: 柱穴
----	---------	----	------	----	-----	----	------
- 8 出土遺物実測図中の土器類の断面については、白抜きが土師器等、網かけが陶磁器を表す。
- 9 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 10 報告書作成において、中国産輸入磁器については、徳留大輔氏（公益財団法人出光美術館 学芸員）、備前焼については、重根弘和氏（岡山県立博物館 学芸員）にご教示・ご協力をいただいた。
- 11 試料の自然科学分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS法）及び鉍滓分析を業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 12 本書の作成・執筆は、上山・水津・河村が共同で行い、編集は上山が行った。なお、本文の執筆分担は、次のとおりである。

I 上山	II 河村	III-1-(1) 上山	(2) 水津・上山
(3) ~ (5) 河村	III-2 上山・河村	IV 業者委託	V 上山

本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過と概要	1
II	遺跡の位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	4
III	調査の成果	5
1	遺構	5
(1)	調査区の概要	5
(2)	掘立柱建物	11
(3)	土坑	24
(4)	溝	25
(5)	柱穴	27
2	遺物	31
(1)	掘立柱建物出土遺物	31
(2)	土坑出土遺物	32
(3)	溝出土遺物	32
(4)	柱穴出土遺物	32
(5)	遺構に伴わない出土遺物	32
IV	自然科学分析	39
1	殿久遺跡におけるAMS法による放射性炭素年代測定	39
2	殿久遺跡出土鉾滓の分析調査	43
V	総括	47
1	調査成果の概要	47
2	遺構について	47
(1)	自然地形と遺構の残存状況	47
(2)	掘立柱建物と関連遺構	47
(3)	土坑	48
3	遺物について	48
4	遺跡を特徴づける立地環境	49
5	おわりに	50

挿図目次

第1図	調査区設定図	1
第2図	遺跡の位置と周辺の道跡	3
第3図	調査区土層図(1・2地区)	7
第4図	調査区土層図(3・4地区)	8
第5図	遺構配置図(1・2・3・4地区)	9-10
第6図	掘立柱建物実測図①	12
第7図	掘立柱建物実測図②	13
第8図	掘立柱建物実測図③	15
第9図	掘立柱建物実測図④	16
第10図	掘立柱建物実測図⑤	17
第11図	掘立柱建物実測図⑥	18
第12図	掘立柱建物構成柱穴実測図①	19
第13図	掘立柱建物構成柱穴実測図②	20

第14図	土坑実測図	24
第15図	溝実測図	26
第16図	柱穴実測図	28
第17図	掘立柱建物出土遺物実測図	31
第18図	土坑・溝・柱穴出土遺物実測図	33
第19図	遺構に伴わない出土遺物実測図①	34
第20図	遺構に伴わない出土遺物実測図②	35
第21図	暦年校正年代グラフ	42
第22図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	46
第23図	掘立柱建物の棟方向分布図	47
第24図	主要出土遺物の時期変遷図	49
第25図	殿久遺跡の立地環境 (中世の山城と居館・集落)	49

表目次

第1表	掘立柱建物一覧表	21
第2表	掘立柱建物構成柱穴一覧表	21
第3表	土坑一覧表	25
第4表	溝一覧表	26
第5表	柱穴一覧表	29
第6表	遺物観察一覧表	36
第7表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	41

第8表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代)	41
第9表	供試材の履歴と調査項目	45
第10表	供試材の化学組成	45
第11表	出土遺物の調査結果のまとめ	45
第12表	柱穴の地区別平均深度一覧表	47

図版目次

図版1	調査区遠景(西から)
図版2	1 調査区遠景(西から) 2 調査区遠景(北から)
図版3	1 調査区全景(上から北) 2 1地区全景 3 2地区全景 4 3地区全景
図版4	1 1地区東側調査区状況(東から) 2 1地区西側調査区状況(西から) 3 1地区東側調査区南壁土層断面状況(北西から) 4 1地区西側調査区北壁土層断面状況(西から) 5 2地区東側調査区状況(東から) 6 2地区西側調査区状況(西から) 7 2地区中央トレンチ土層断面状況(南西から) 8 2地区西側調査区東壁土層断面状況(北東から)
図版5	1 3地区東側調査区状況(東から) 2 3地区西側調査区状況(西から) 3 3地区東側調査区東壁土層断面状況(北西から) 4 3地区西側調査区西壁土層断面状況(東から) 5 4地区南側調査区状況(南から) 6 4地区南側調査区東壁土層断面状況(西から) 7 4地区中央調査区東壁土層断面状況(西から) 8 4地区北側東壁土層断面状況(西から)
図版6	1 1地区西側調査区掘立柱建物群(上空から) 2 1地区西側調査区掘立柱建物群(東から) 3 1地区西側調査区SBI02-7遺物出土状況(東から) 4 1地区西側調査区SBI05-3石出土状況(北から)
図版7	1 3地区東側調査区掘立柱建物群(上空から) 2 3地区西側調査区掘立柱建物群(上空から) 3 3地区西側調査区掘立柱建物群(北から)

図版8	1 3地区東側調査区SB304-2遺物出土状況(東から) 2 3地区東側調査区SB305-2遺物・石出土状況(北から) 3 3地区東側調査区SB307-7石出土状況(東から) 4 3地区西側調査区SB309-1石出土状況(西から) 5 3地区西側調査区SB314-4遺物出土状況(西から) 6 3地区西側調査区SB311-2石出土状況(東から) 7 3地区西側調査区SB311-5遺物出土状況(西から) 8 3地区西側調査区SB316-5石出土状況(西から)
図版9	1 1地区西側調査区土坑(SK101)検出状況(東から) 2 1地区西側調査区土坑(SK101)土層断面状況(東から) 3 3地区東側調査区土坑(SK301)土層断面状況(南から) 4 3地区東側調査区土坑(SK302)遺物出土状況(北から) 5 3地区西側調査区土坑(SK303)土層断面状況(東から) 6 3地区西側調査区土坑(SK304)土層断面状況(東から) 7 1地区東側調査区溝(SD101)土層断面状況(南西から) 8 1地区西側調査区溝(SD102)土層断面状況(北から)
図版10	1 3地区東側調査区溝(SD302)土層断面状況(南から) 2 3地区東側調査区溝(SD302・SD303)完掘状況(南から) 3 1地区東側調査区柱穴(SPI06)遺物・石出土状況(南から) 4 1地区西側調査区柱穴(SPI021)石出土状況(北から) 5 1地区西側調査区柱穴(SPI026)遺物出土状況(東から) 6 1地区西側調査区柱穴(SPI033)石出土状況(東から) 7 1地区西側調査区柱穴(SPI008)石出土状況(北から) 8 3地区東側調査区柱穴(SPI021)遺物出土状況(西から)
図版11	出土遺物①
図版12	出土遺物②
図版13	出土遺物③
図版14	出土遺物④
図版15	出土遺物⑤
図版16	出土遺物⑥

I 調査の経緯と概要

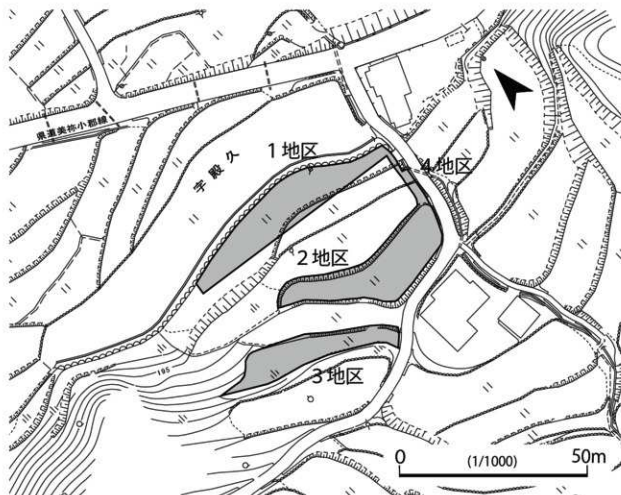
1 調査に至る経緯

中山間地域総合整備事業 美祿地区の実施に先立ち、事業主体の山口県美祿農林事務所から山口県教育委員会に対して、事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会が行われた。これを受けて山口県教育委員会は美祿市伊佐町杉谷地区において平成24年1～2月に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。その結果、事業予定地内に中世の埋蔵文化財が存在することが確認され、「殿久遺跡」(美祿市伊佐町伊佐殿久地内)として、周知の埋蔵文化財包蔵地に登録された。

この試掘調査の結果を受けて、山口県教育委員会と山口県美祿農林事務所は、埋蔵文化財の所在範囲の取扱いについて協議を行い、工事によって埋蔵文化財が消失する範囲の1,350㎡については、記録保存のための発掘調査が必要と判断した。以上の経緯を経て、両機関からの委託を受けて公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過と概要

現地調査を開始するに当たり、調査対象地区の現況確認や関連資料調査等を行いながら、山口県美祿農林事務所・地元土地改良区等との打ち合わせを行うとともに、近隣の小・中学校、警察署、消防署、自治会等に調査期間中における安全確保等のための理解と協力を要請した。



第1図 調査区設定図



重機による表土除去作業



遺構掘り込み作業



現地説明会

発掘調査範囲は、段状の旧耕作地（休耕田）に分かれているため、便宜的に北側の丘陵先端部から南側の山麓部にかけて1・2・3地区、用水路工事予定範囲の東側の細長い範囲を4地区として、調査区を呼称することにした（第1図）。

事前の諸準備を経て、10月2日から当センターの委託業者による重機を用いた表土除去作業を手始めに現地での本格的な発掘調査に着手した。仮設調査事務所・駐車場用地の整地作業後、表土除去作業は、標高の高い3地区から2・1地区の順番に進めた。なお、表土除去作業では、耕作土とそれ以下の遺構面までの掘削土を分別して、調査範囲外の限られた面積の隣接地に移動して仮置きする工程を取ったため、予定以上の期間を要した。

10月6日には、発掘作業員説明会を下杉谷集会所で開催し、作業内容の確認や安全管理等について事前の周知徹底を図った。10月7日には仮設調査事務所を設置した。10月14日からは、表土除去作業が終わった3地区から順次、発掘調査作業員の人力による調査区壁面清掃と遺構検出作業を進めた。表土除去作業は、10月21日に終了し、遺構検出作業も10月29日にひととおり終了した。他方、遺構の実測等の基準となる国土座標（世界測地系）設置作業を専門業者に委託して行い、遺構検出作業を終えた地区から順次、ト

ータルステーションを使用して、調査員による遺構配置図の作成を行った。

11月に入ると、天候不順で降雨の日が多く、作業日程に支障をきたし、当初予定よりも進捗状況に少しずつ遅れが生じた。天候不順の合間を見ながら、作業内容や手順を工夫しつつ、作業員による柱穴を主体とする遺構の掘り込み作業を進める一方、調査員による遺構の状況や遺物出土状況の写真撮影と図面実測作業を併行して実施した。遺構の掘り込み作業が進み、遺跡の特徴や性格が一定程度明らかになった時点の11月21日に地元住民ほか一般の方々を対象とした現地説明会を開催した。調査員が調査区内の遺構や出土した遺物の説明を行い、約60人の見学者があった。その後、調査区全体の清掃作業を行い、降雨の合間を縫って、11月28日にラジコンヘリコプターでの空中写真撮影を実施した。

12月に入り、個別遺構の出土状況・調査区壁土層断面図実測、完掘状況の遺構配置全体図作成、写真撮影等の調査員による現地記録作業を中心に、12月17日に現地での発掘調査作業を終了した。

続いて、山口県美祿農林事務所の指示に従って、現地の保全と安全対策のために、表土除去作業を委託した業者の重機による埋め戻し作業を行い、12月28日に現地での全ての作業を終了した。

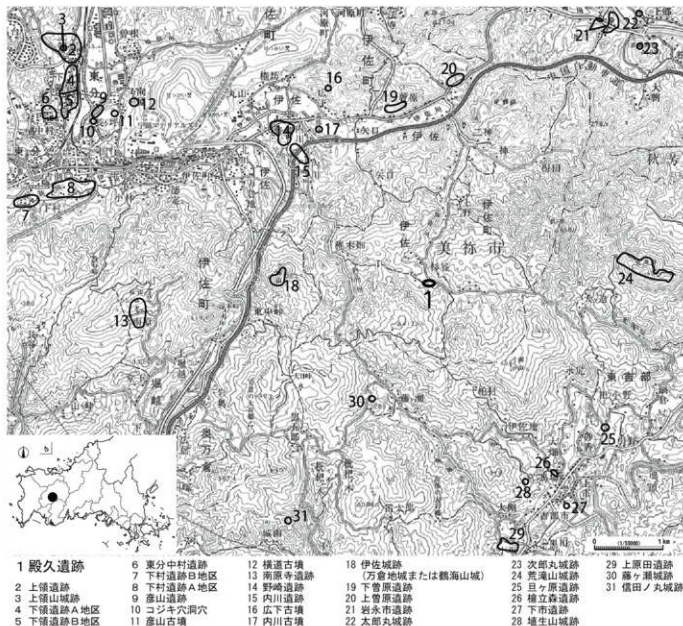
その後、遺構図面の整理、出土遺物の実測作業や写真撮影、編集・執筆等を行い、この報告書を刊行するに至った。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

殿久遺跡は、山口県美祿市伊佐町伊佐久に所在する。美祿市は山口県のはほぼ中央部に位置する。日本最大のカルスト台地である秋吉台を有し、大嶺盆地をはじめとする盆地に集落が点在している。古くから銅や石灰岩など地下資源の産地として知られ、現在も石灰岩を産出しているほか、保存状態の良好な化石も数多く産出する。

殿久遺跡が所在する下杉谷地区は美祿市の中心部から南東に約5.2km、日ノ岳の南西側に面し、伊佐川上流の谷あいには位置する。標高は約200mで寒暖の差が大きい。集落の中心を美祿市の中心部と宇部市楠町吉部を結ぶ連絡道が通り、東方に荒滝山を望む。遺跡は、下杉谷地区山麓の北東に向けて張り出す丘陵上に立地する。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

2 歴史的環境

美祿市には、旧石器時代から人々が生活していたことがわかっている。秋吉台上に所在する北馬コロビ遺跡から頁岩やササカイト製の尖頭型石器が、船ヶ窪遺跡からもチョッパー・ナイフなどが発見されている。

縄文時代の遺跡は、大嶺盆地・伊佐盆地周辺を中心に分布している。コジキ穴洞穴（10）からは、人骨と臼歯、貝輪・石鎌・イノシシ骨加工品・縄文土器などが出土した。縄文時代の洞窟住居跡であった可能性がある。なお、宇部市楠木町東吉部の上原田遺跡（29）では縄文時代晩期を主体とした集落が営まれていたことがわかっており、美祿市域の縄文時代の遺跡との地域的な関連をうかがわせる。

弥生時代には、豊富な湧水を利用することにより早い段階から稲作が行われていたと推測されている。なかでも東分中村遺跡（6）は多数の土坑や住居跡とともに、前期末から後期にかけての土器が出土した、美祿市域で最大規模の弥生時代の集落遺跡である。また下村遺跡A地区（8）は中期初頭の集落跡で、貯蔵穴からシカが描かれた絵画土器が出土した。彦山遺跡（9）など中期の高地性集落の可能性のある集落遺跡も見つかっている。

古墳時代、地方豪族が台頭し古墳が築造され始めても、美祿市域では弥生時代に引き続き組合箱式石棺墓が主流であった。前期または中期古墳に比定されるのは、美祿市伊佐町の内川古墳（17）のみである。後期に入ると山間部にも中央政権の影響がおよび、全国的に古墳が増加した。美祿市域でも横道古墳（12）や彦山古墳（11）など、於福・大嶺・伊佐盆地を中心に小規模な円墳が築造されている。古墳時代の集落遺跡としては、上領遺跡（2）が代表例にあげられ、埴のある住居跡や土製勾玉などの祭祀用具が発見された。これらの古墳や集落跡は大嶺盆地を中心に密集していることから、古来よりここが主要な農業生産の場であったことがうかがわれる。

古代国家形成期、美祿地域は穴門国（後に長門国と改称）の領域にあり、大嶺盆地を中心に美祿郡がおかれていた。美祿市伊佐町野崎及び大嶺町曾根から吉則にかけて、古代の条里とみられる遺構が確認されている。また美祿郡には山陽道と山陰道を結ぶ陰陽連絡道が通り、阿津・鹿野・意福の駅家が置かれていたことがわかっている。

中世になると各地に荘園が成立し、美祿市域にも大峯庄・伊佐庄・於福庄が置かれた。また武家勢力が台頭し、防長両国でも周防守護職の大内氏、長門守護職の厚東氏が勢力を伸ばした。室町時代の14世紀後半には大内氏が防長両国を統治し、その後当地にも重臣杉氏などによって大内氏の支配が及んだ。大内氏が毛利氏に討たれ滅亡（1557年）した後、大内氏の家臣であった内藤氏が長門守護役に任ぜられた。16世紀半ばに守護代となった内藤隆春は、殿久遺跡の東にそびえる荒滝山城（24）を要害とし、その麓の宇部市楠木町小野に居館を構えた。現在も居館の基礎と伝えられる石組が残っている。

近世の江戸時代には、防長両国は毛利氏の統治下に置かれ、当地も明治維新までその支配を受けることとなった。

【参考文献】

- 原田卓雄 1980『楠町の歴史』楠町
- 美祿市史編集委員会 編 1982『美祿市史』美祿市
- 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1994『下市遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告 第169集 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会
- 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1995『上原田遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告 第176集 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会
- 河本芳久 編 1999『東分中村経塚』美祿市教育委員会
- 宇部市教育委員会 2005『荒滝山城跡』宇部市埋蔵文化財調査報告 第1集

Ⅲ 調査の成果

1 遺構

(1) 調査区の概要

①遺構の立地状況(第3～5図、図版1～5)

遺跡は、南側背後にそびえる標高412mの山頂の麓で、北東側に向かって延びる標高約199～193mの丘陵上に立地する。南側には伊佐川によって開かれた狭い谷平野が形成されている。遺構が所在する基盤となる地山は、花崗岩風化粘質土で形成される。ただし、この粘質土中には、所々露出した数十cm大の角礫や1mを超える大型の岩石が含まれていた。

調査区範囲で遺構が確認されたのは、3地区はほぼ全面に広がる丘陵部、2地区の西側調査区の一部で検出された丘陵部、1地区西側に広がる丘陵部であった。2地区西側調査区で丘陵を形成する花崗岩風化粘質土の地山面が検出される一方、東側調査区では背後の山から流れ込んだ土石や角礫の堆積層が確認され、谷筋地形が2地区東側に広がることが明らかになった。また、1地区東側調査区でも2地区同様に東側で谷筋地形が確認された。この結果、南側から北側に張り出す丘陵の東側は比較的大きな谷筋地形で、遺構は検出されなかった。さらに、近世以降と見られる後世に段カットして耕作地化されたために、丘陵中心軸部付近に相当する1地区及び3地区の中央部は遺構面が大きく削平されて、遺構は残存していない状況であった。

②基本層序(第3～5図、図版4・5)

調査前には1～4地区は旧耕作田荒蕪地となっていた。以下に、各地区の土層断面の所見を示す。

1地区(第3図、図版4—1・2・3・4)

東側調査区南壁の土層断面(1A-1A')は、表土除去により取り除いた耕作土以下の土層に当たり、客土(明褐色粘質土と灰褐色粘質土混合)→旧耕作土か(青灰色粘質土)→自然堆積土(暗青灰色砂礫土)となる。下層の暗青灰色砂礫土は山麓上位からの堆積層で、湧水があり、調査区西側の丘陵部から東側にかけて落ち込む谷筋地形にあたる。

西側調査区北壁の土層断面(1B-1B'、1C-1C')は、表土除去により取り除いた耕作土以下の地山面までの土層を示す。遺構検出面となる地山(にぶい褐色粘質土、1B-1B'の17層、1C-1C'の11層)までの層(1B-1B'の1～16層、1C-1C'の1～9層)は、後世(近世以降と推定)、客土によって埋めて平坦な耕作地を人為的に造成した際に形成された層と考えられる。もともとの自然地形の丘陵は、南側(上位)から北側(下位)に、東側から西側に、それぞれ緩傾斜していたことがわかる。下層(1B-1B'の9・10・13・14層、1C-1C'の9層など)には、丘陵の地山削平による黄橙色～にぶい黄褐色粘質土と山麓に由来する大型の山角礫や小風化礫が混合した客土層が観察された。こうした客土造成層中には、旧遺構面の削平により混入した炭化物小片や土器片などが含まれていた。

2地区(第3図、図版4—5・6・7・8)

東側調査区南壁の土層断面(2A-2A')は、表土(褐色粘質土)→耕作土上層(褐色粘質土)→耕作土下層(灰色粘質土)→地山(灰色砂粒土)となる。地山は小礫・山角礫を含む谷筋堆積層である。

中央部トレンチ東壁の土層断面(2B-2B')は、表土除去により取り除いた耕作土以下の土層にあたり、小礫・山角礫を含む谷筋堆積層によって形成される地山(灰色砂粒土、9層)の上に客土(1~5、7~8層)を盛り、平坦に整地し耕作地化した状況が観察された。旧耕作土らしき褐灰色粘質土(6層)がみられ、谷筋地形を繰り返して客土造成し、狭い耕作地を段階的に拡張していった状況が確認される。

西側調査区南壁の土層断面(2C-2C')は、耕作土上層・下層(褐灰色粘質土)→盤土(明黄褐色粘質土)→客土(灰黄褐色粘質土)→地山(黄褐色粘質土～山角礫含む)となる。この範囲の地山面は丘陵部にあたり、柱穴(5層)が検出されたが、深さが浅く、分布密度も低いことから、耕地化の際にかなりの削平を受けた状況が認められた。土層断面東端の4層あたりで、2A-2A'、2B-2B'で確認された谷筋地形に向かう東側への丘陵の落ち込みが見られた。

3地区(第4図、図版5-1・2・3・4)

東側調査区東壁の土層断面(3A-3A')は、表土(土手)(褐灰色粘質土)→耕作土(灰黄褐色粘質土)→盤土(黄褐色粘質土)→旧耕作土か(褐灰色粘質土)→地山(花崗岩風化礫土)となる。

東側調査区南壁の土層断面(3B-3B')は、耕作土(灰黄褐色粘質土)→地山(花崗岩風化粘質土)となる。

西側調査区南壁の土層断面(3C-3C')は、表土(腐植土)(褐灰色粘質土)→耕作土(灰黄褐色粘質土)→地山(花崗岩風化礫土)となる。

以上、3箇所(3箇所)の土層からわかるように、基本的には耕作土下には丘陵を形成する地山が広がり、遺構検出面となる。

西側調査区西壁・北壁の土層断面(3D1-3D2-3D3)は、客土(にぶい赤褐色粘質土ほか1~5層、9~14層)→自然堆積土(灰褐色粘質土ほか6・8・15層)→地山(褐色粘質土)となる。南側(上位)から北側(下位)に、東側から西側に、それぞれ緩傾斜していた自然地形の落ち込み部に、後世、客土造成して耕作地化したことがわかる。

4地区(第4図、図版5-5・6・7・8)

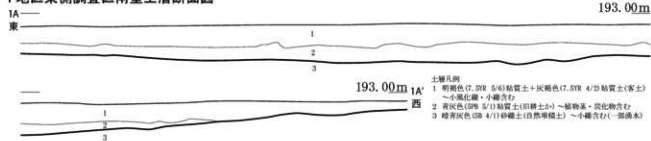
調査区南側(標高所)から北側(標高低所)にかけて、段落ちする旧耕作田を縦断する東壁土層断面は、次のようになる。

最上位段(1段目)の東壁土層断面(4A-4A')は、平坦面は耕作土(褐灰色粘質土)・盤土(明黄褐色粘質土)→旧耕作土・旧盤土の層序が確認され、その下に橙色粘質土の地山が広がる。北側の段落ち斜面は、山角礫を含む粘質土により、土留め・土手が形成されている。

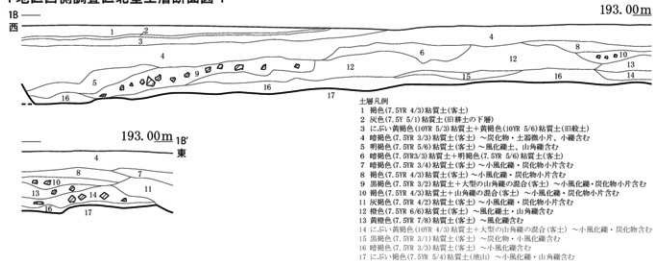
中段位(2段目)の東壁土層断面(4B-4B')は、平坦面では、耕作土・旧耕作土→客土(にぶい黄褐色粘質土・橙色粘質土)→地山(橙色粘質土)となる。北側の段落ち斜面は、1段目と同じ状況である。

下位段(3段目)の東壁土層断面(4C-4C')は、旧耕作土(灰黄褐色粘質土)→客土(明褐色粘質土)→旧耕作土か(青灰色粘質土)→地山(明黄褐色粘質土)となる。客土中には土留め的な大型の石が据わっている。地山には小角礫・山角礫を含み、土石流などの上位からの流れ込み土が谷筋に堆積して形成された地形であることをうかがわせる。

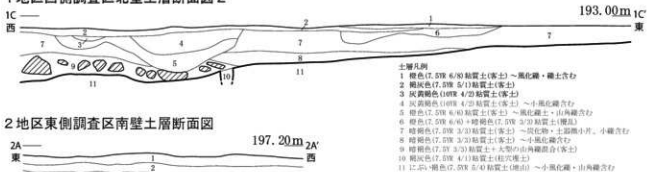
1 地区東側調査区南壁土層断面図



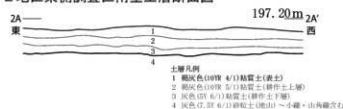
1 地区西側調査区北壁土層断面図 1



1 地区西側調査区北壁土層断面図 2



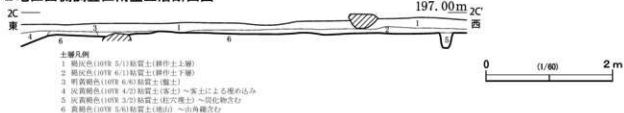
2 地区東側調査区南壁土層断面図



2 地区中央部トレンチ東壁土層断面図

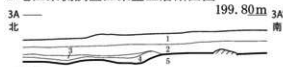


2 地区西側調査区南壁土層断面図



第3図 調査区土層図(1・2地区)

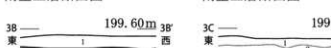
3地区東側調査区東壁土層断面図



土層凡例

- 1 緑灰色 (01R 4/1) 粘質土 (表土・土層)
- 2 灰黄褐色 (01R 5/2) 粘質土 (耕作土)
- 3 黄褐色 (01R 5/4) 粘質土 (墾作土)
- 4 緑灰色 (01R 4/1) 粘質土 (墾作土より風化物・マンガン少量含む)
- 5 緑灰色・黄褐色 (01R 4/3) 花崗岩風化礫土 (地山) ～砂礫が多く、大型角礫含む

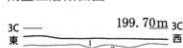
3地区東側調査区南壁土層断面図



土層凡例

- 1 灰黄褐色 (01R 5/2) 粘質土 (耕作土)
- 2 黄褐色 (01R 5/4) 花崗岩風化礫土 (地山) ～角礫含む

3地区西側調査区南壁土層断面図



土層凡例

- 1 緑灰色 (01R 4/1) 粘質土 (表土) ～腐植土
- 2 灰黄褐色 (01R 5/2) 粘質土 (耕作土)
- 3 明褐色 (01R 5/4) 花崗岩風化礫土 (地山) ～風化角礫含む

3地区西側調査区西壁・北壁土層断面図



土層凡例

- 1 緑灰色 (01R 5/4) 粘質土 (表土)
- 2 灰黄褐色 (01R 6/2) 粘質土 (窪み) ～押し溜り込み
- 3 灰色 (01R 2/1) 風化物～押し溜りに腐り込みを伴った物
- 4 灰色・褐色 (01R 5/3) 粘質土 (表土) ～小角礫含む
- 5 褐色 (01R 6/4) 粘質土 (表土) ～小角礫含む
- 6 灰褐色 (01R 4/2) 粘質土 (自然堆積土層) ～上からの流れ込み主、風化物少量含む
- 7 褐色 (01R 4/3) 粘質土 + 大型山角礫の混合 (山の境界部の溜り石)
- 8 灰褐色 (01R 4/2) 粘質土 (自然堆積土層) ～上からの流れ込み主
- 9 緑灰色 (01R 5/4) 粘質土 (表土)
- 10 明褐色 (01R 5/4) 粘質土 (表土)
- 11 灰褐色 (01R 4/2) 粘質土 (表土) ～小角礫、風化物含む
- 12 褐色 (01R 4/3) 粘質土 (表土) ～小角礫、風化物含む
- 13 褐色 (01R 4/4) 粘質土 (表土) ～小角礫、山角礫、風化物小片一部含む
- 14 灰褐色 (01R 4/1) 粘質土 (表土)
- 15 灰褐色 (01R 4/2) 粘質土 (自然堆積土層) ～上からの流れ込み主
- 16 褐色 (01R 4/3) 粘質土 (地山) ～小角礫、大型角礫一部含む

4地区東壁最上位1段目土層断面図



土層凡例

- 1 緑灰色 (01R 6/1) 粘質土 (段落ち斜面表土)
- 2 緑灰色 (01R 6/1) 粘質土 (段落ち斜面表土)
- 3 明黄褐色 (01R 6/4) 粘質土 (表土)
- 4 緑灰色 (01R 5/1) 粘質土 (墾作土) ～小角礫含む
- 5 緑灰色 (01R 5/1) 粘質土 (土層)
- 6 灰黄褐色 (01R 5/2) 粘質土 + 大型山角礫の混合 (段落ち斜面表土)
- 7 黄褐色 (01R 5/4) 粘質土 (表土) ～山角礫含む
- 8 灰黄褐色 (01R 5/2) 粘質土 (段落ち斜面表土) ～山角礫含む
- 9 緑灰色 (01R 5/3) 粘質土 (表土) ～山角礫含む
- 10 褐色 (01R 6/4) 粘質土 (地山) ～山角礫含む

4地区東壁2段目土層断面図



土層凡例

- 1 緑灰色 (01R 5/1) 粘質土 (段落ち斜面表土)
- 2 緑灰色 (01R 6/1) 粘質土 (段落ち斜面表土)
- 3 緑灰色 (01R 4/1) 粘質土 (墾作土)
- 4 明黄褐色 (01R 6/4) 粘質土 (表土) ～マンガンを含む
- 5 灰色 (01R 6/4) 粘質土 (墾作土)
- 6 緑灰色 (01R 5/1) 粘質土 (表土) ～マンガンを含む
- 7 灰黄褐色 (01R 4/2) 粘質土 (表土) ～山角礫含む
- 8 褐色 (01R 4/4) 粘質土 (表土) ～山角礫含む
- 9 緑灰色 (01R 5/3) 粘質土 (表土) ～山角礫含む
- 10 褐色 (01R 6/4) 粘質土 (地山) ～山角礫多く含む (谷地所)

4地区東壁3段目土層断面図



土層凡例

- 1 灰黄褐色 (01R 4/2) 粘質土 (墾作土)
- 2 明褐色 (01R 5/4) 粘質土 (表土) ～風化少量含む
- 3 黄灰色 (01R 5/1) 粘質土 (墾作土より風化物含む)
- 4 明黄褐色 (01R 7/4) 粘質土 (地山) ～小角礫、山角礫含む

4地区東壁最下位4段目土層断面図



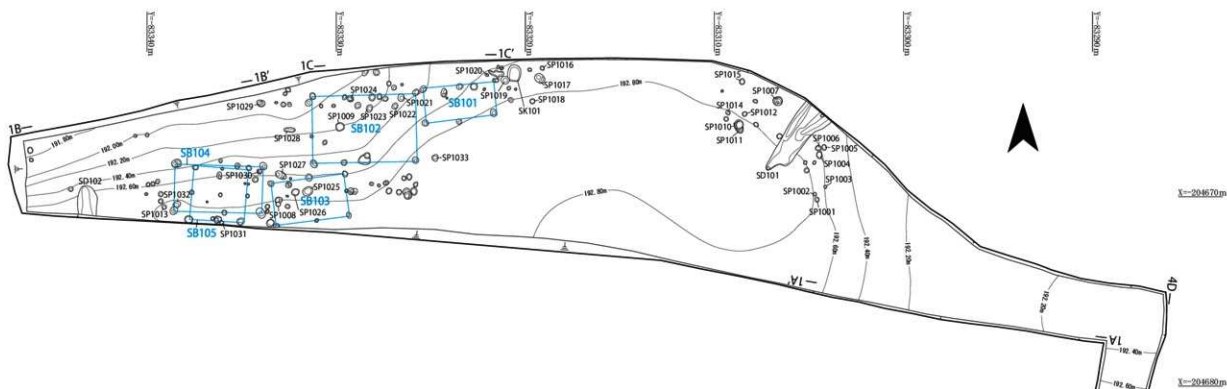
土層凡例

- 1 緑灰色 (01R 5/1) 粘質土 (表土)
- 2 灰黄褐色 (01R 5/2) 粘質土 (耕作土)
- 3 褐色 (01R 6/1) 粘質土 (表土) ～山礫砂片を多く含む
- 4 明褐色 (01R 5/4) 粘質土 (表土) ～風化少量含む
- 5 灰色 (01R 4/1) 粘質土 (墾作土)
- 6 緑灰色 (01R 5/1) 粘質土 (墾作土)
- 7 黄灰色 (01R 5/1) 粘質土 (墾作土より風化物含む)
- 8 緑灰色 (01R 6/4) 粘質土 (地山) ～山角礫、大型角礫含む

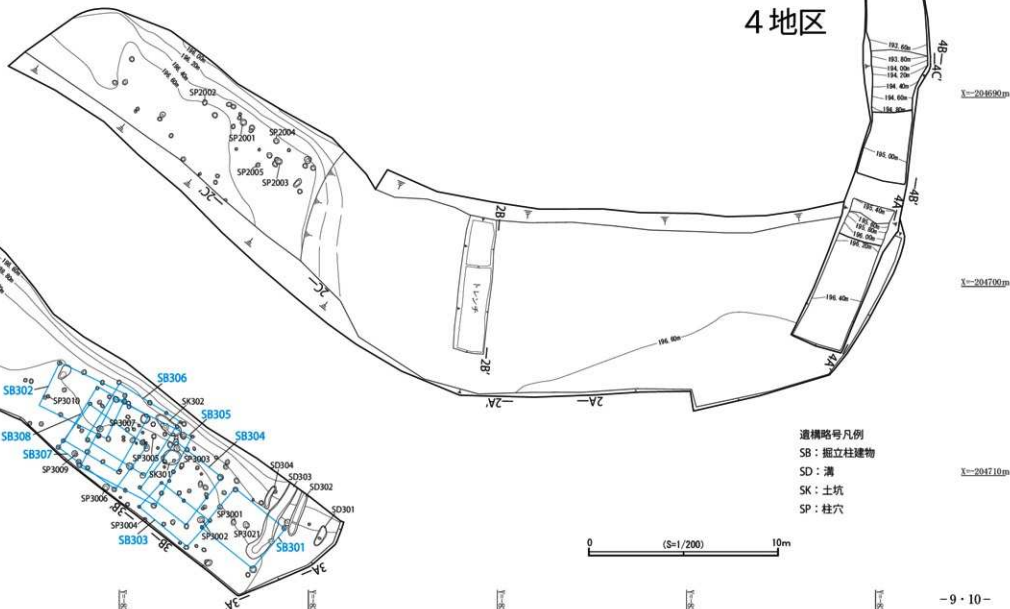
第4図 調査区土層図 (3・4地区)

0 (1/80) 2m

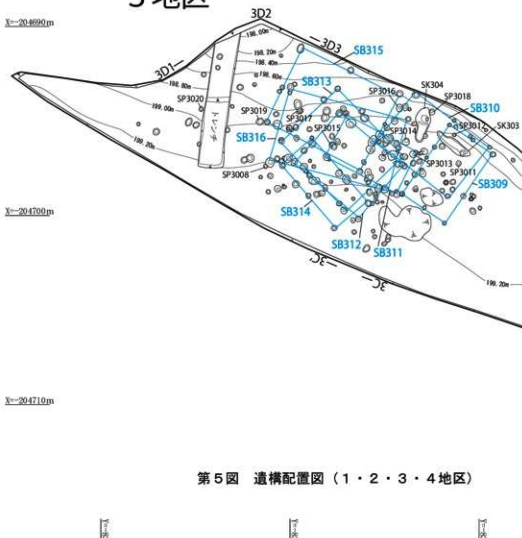
1地区



2地区



3地区



4地区

遺構略号凡例
 SB：掘立柱建物
 SD：溝
 SK：土坑
 SP：柱穴

第5図 遺構配置図(1・2・3・4地区)

0 (S=1/200) 10m

最下位段（4段目）の東壁土層断面（4D-4D'）は、表土（褐灰色粘質土）→耕作土（灰黄褐色粘質土）→客土（明褐色粘質土）→旧耕作土（灰色粘質土）→旧盤土（にぶい黄褐色粘質土）→旧耕作土（青灰色粘質土）→地山（にぶい黄褐色風化礫土）となる。

4地区の土層断面では、山麓上位から流出した土石・山礫などを含む橙色粘質土・風化礫土の谷筋地形を後世に削平による段カットを行って平らな耕作地とし、さらに造成を繰り返して規模拡大の耕地整理を行った状況が確認された。

③遺構の内容・分布・時期（第5図、図版3～10）

発掘調査により検出された主な遺構は、掘立柱建物21棟、土坑5基、溝6条、柱穴約513個（掘立柱建物の構成柱穴を含む）である。東西方向を棟方向とする掘立柱建物を主体として、遺構は1・3地区の丘陵部を中心に分布する状況が確認された。主な出土遺物は、土師器・瓦質土器・陶器、中国産輸入磁器などの中世（室町時代、14～16世紀代）を中心とした時期のものであり、放射性炭素年代測定の結果（第4章第1節参照）も勘案して、当遺跡は中世の集落遺跡であると考えられる。

（2）掘立柱建物（第5～13図、図版6～8）

513個の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物が21棟復元された（第1・2表）。建物の位置は1地区西側に5棟、3地区東側に8棟、3地区西側に8棟である。一方、各調査区の中央部は後世の削平の影響を受けたと見られ、掘立柱建物が全く検出されなかった。なお、建物の復元にあたっては、四隅の主柱穴を基準とし、柱間の間隔が不均一なものや対面の柱が確認されないものについても、掘方のない支柱や後世の削平による消失などを考慮して、掘立柱建物としての可能性があるものはなるべく取り上げることにした。また、柱痕跡が確認できたSB313では、掘立柱建物実測図の柱穴に網かけで表示をした（第10図）。このほかに、柱穴の基底部や中位で石・角礫が一定割合検出された（SB105-3、SB302-1ほか、第12・13図、図版6・8）。柱を固定する詰め石が廃絶後や柱抜き取り後にそのまま残されたり、周辺から投棄されたりしたものと同定される。近隣では、且ヶ原遺跡で3間×2間の掘立柱建物SB02の構成柱穴10個全てで同様に石が充填された状況が確認されている。この時期、当地域周辺で一般的に採用された建物柱の設置・撤去の方法であったことがうかがわれる。

SB101（第6図、図版6） 1地区の中央西側に位置する。規模は2間（3.9m）×1間（1.8m）、床面積7.0㎡。棟方向はN84°E。柱間は桁行1.9・2.0m、梁行1.8m。構成柱穴の平均径は32.1cm、平均深度は31.9cm。SB101-3から土師器皿（1）、土師器杯（2）が出土した。建物の時期は中世に比定される。

SB102（第6図、図版6） 1地区最大の建物で、1地区の西側に位置する。規模は2間（5.5m）×2間（3.6m）、床面積19.8㎡。棟方向はN88°E。柱間は桁行3.1・2.4m、梁行2.1・1.5m。構成柱穴の平均径は36.6cm、平均深度は18.6cm。SB102-6から土師器杯（3・4）、SB102-7から土師器杯（5）が出土した。建物の時期は中世に比定される。

SB103（第7図、図版6） 1地区の中央西側に位置する。規模は2間（4.0m）×1間（2.3m）で床面積9.2㎡。棟方向はN82°E。柱間は桁行2.1・1.9m、梁行2.3m。構成柱穴の平均径は29.5cm、平均深度は16.8cm。建物の時期は中世に比定される。

SB104（第7図、図版6） 1地区の南西部に位置し、SB105と重複する。規模は2間（4.7m）×1間（2.5m）で床面積は11.8㎡。棟方向はN88°W。柱間は桁行3.3・1.4m、梁行2.5m。構成柱穴の平均

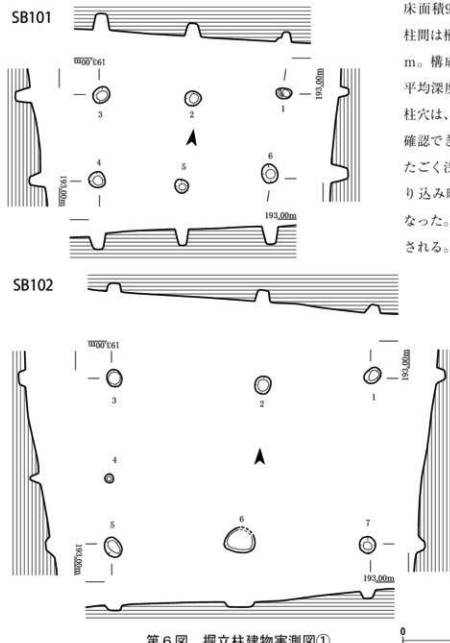
径は38.3cm、平均深度は31.6cm。SB104-1から土師器杯（8）、SB104-4から土師器杯（6・7）、SB104-5から土師器杯（9）が出土した。出土遺物の特徴とSB104-6より採取した炭化物（試料2）の放射性炭素年代測定により、建物の時期は中世と推定される。

SB105（第7図、図版6） 1地区の南西部に位置し、SB104と重複する。規模は2間（29m）×2間（28m）の総柱建物で、床面積81㎡。棟方向はN87°W。柱間は桁行1.5・1.4m、梁行1.4・1.4m。構成柱穴の平均径は28.4cm、平均深度は22.2cm。SB105-5から土師器皿（10）が出土した。建物の時期は中世に比定される。

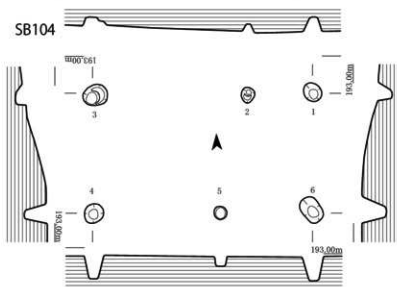
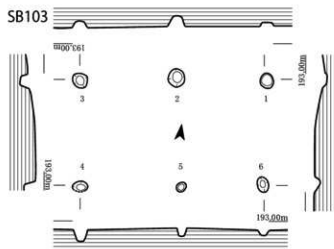
SB301（第8図、図版7） 3地区の東端に位置し、SB303と重複する。規模は1間（3.3m）×1間（2.7m）、床面積8.9㎡。棟方向はN51°W。構成柱穴の平均径は26.5cm、平均深度は24.8cm。建物の時期は中世に比定される。

SB302（第8図、図版7） 3地区の中央東側に位置し、SB305・SB306・SB307・SB308と重複する。

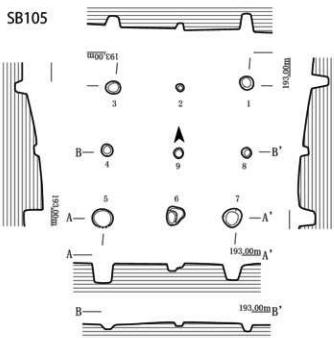
規模は3間（3.8m）×1間（2.5m）、床面積9.5㎡。棟方向はN64°W。柱間は桁行1.3・1.1・1.4m、梁行2.5m。構成柱穴の平均径は23.1cm、平均深度は17.6cm。建物南西隅の柱穴は、遺構検出時にはわずかに確認できたが、後世の削平を受けたごく浅い柱穴であったため、掘り込み時点では輪郭が不明瞭となった。建物の時期は中世に比定される。



第6図 掘立柱建物実測図①

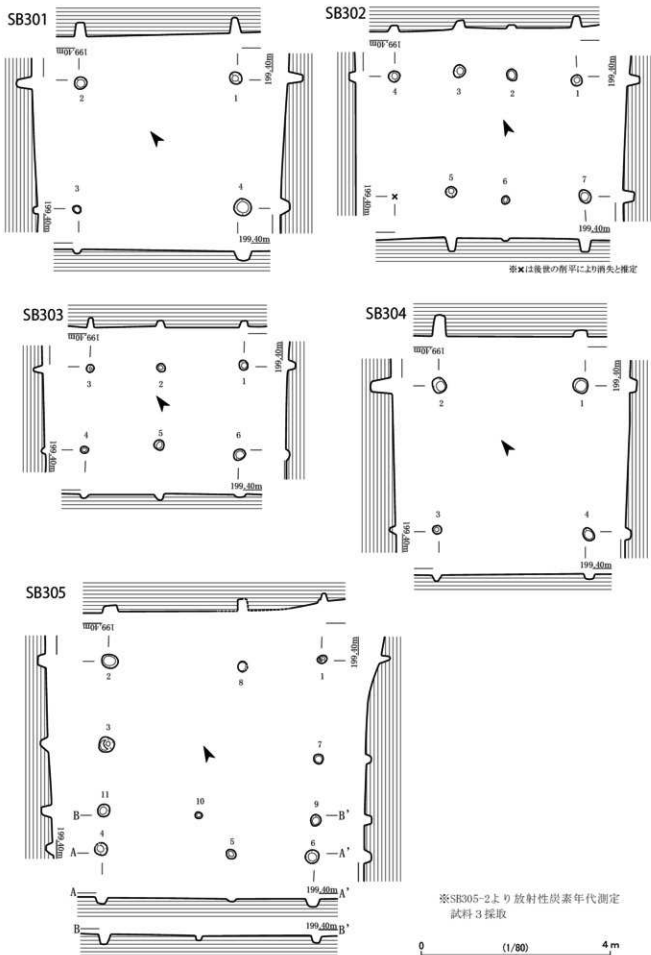


※SB104-6より放射性炭素年代測定試料2採取

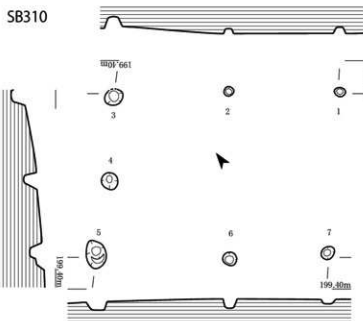
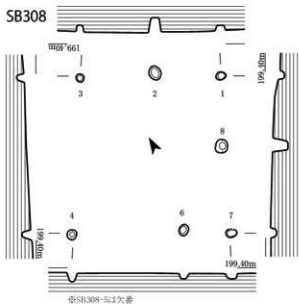
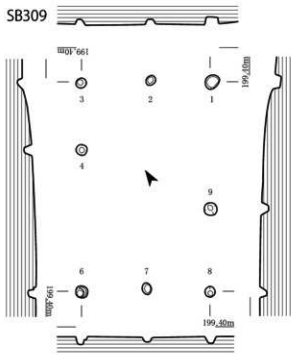
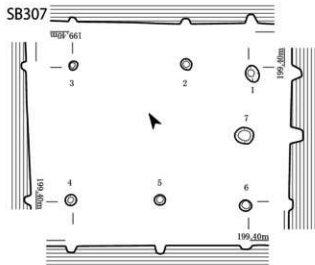
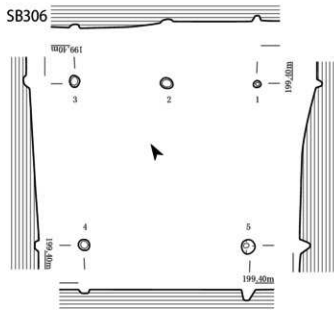


第7図 掘立柱建物実測図②

- SB303 (第8図、図版7) 3地区の南東端に位置し、SB301・SB304・SB305と重複する。規模は2間(3.3m)×1間(1.7m)、床面積は調査区最小の5.6㎡。棟方向はN51°W。柱間は桁行1.5・1.8m、梁行1.7m。構成柱穴の平均径は19.4cm、平均深度は12.8cm。出土遺物はなく、建物の時期は不明である。
- SB304 (第8図、図版7) 3地区の東側に位置し、SB303・SB305と重複する。規模は1間(3.0m)×1間(3.0m)で正方形を呈する。床面積は9.0㎡。棟方向はN52°W。構成柱穴の平均径は26.1cm、平均深度は20.6cm。SB304-2から土師器杯(11)、瓦質土器鉢(12)、土師器足鍋(13)が出土した。建物の時期は中世に比定される。
- SB305 (第8図、図版7) 3地区の東側に位置し、SB303・SB304・SB306・SB307・SB308と重複する。規模は2間(4.5m)×2間(4.0m)を基本とし、SB305-9・10・11は間仕切りの柱穴と推定される。床面積18.0㎡。棟方向はN64°W。柱間は桁行2.8・1.7m、梁行1.8・2.2m。構成柱穴の平均径は23.8cm、平均深度は20.3cm。SB305-6から瓦質土器鍋(14)、SB305-2から土師器足鍋(15)が出土した。出土遺物の特徴とSB305-2より採取した炭化物(試料3)の放射性炭素年代測定を勘案して、建物の時期は中世と推定される。
- SB306 (第9図、図版7) 3地区の東側に位置し、SB305・SB307・SB308と重複する。規模は2間(3.8m)×1間(3.5m)、床面積13.3㎡。棟方向はN59°W。柱間は桁行1.9・1.9m、梁行3.5m。構成柱穴の平均径は23.1cm、平均深度は12.6cm。出土遺物はなく、建物の時期は不明である。
- SB307 (第9図、図版7) 3地区の中央東側に位置し、SB302・SB305・SB306・SB308と重複する。規模は2間(3.8m)×2間(2.8m)、床面積10.6㎡。棟方向はN54°W。柱間は桁行2.4・1.4m、梁行1.3・1.5m。構成柱穴の平均径は26.4cm、平均深度は15.2cm。出土遺物はなく、建物の時期は不明である。
- SB308 (第9図、図版7) 3地区の東側に位置し、SB302・SB305・SB306・SB307と重複する。規模は2間(3.4m)×2間(3.0m)、床面積は10.2㎡。棟方向はN31°E。柱間は桁行1.5・1.9m、梁行1.6・1.4m。構成柱穴の平均径は22.0cm、平均深度は18.1cm。建物の時期は中世に比定される。
- SB309 (第9図、図版7) 3地区の中央西側に位置し、SB310と重複する。規模は2間(4.4m)×2間(2.8m)、床面積12.3㎡。棟方向はN34°E。柱間は桁行1.4・3.0m、梁行1.5・1.3m。構成柱穴の平均径は24.2cm、平均深度は14.3cm。建物の時期は中世に比定される。
- SB310 (第9図、図版7) 3地区の西側に位置し、SB309・SB311・SB312・SB313・SB315・SB316と重複する。規模は2間(4.8m)×2間(3.5m)、床面積16.8㎡。棟方向はN52°W。柱間は桁行2.4・2.4m、梁行1.8・1.7m。構成柱穴の平均径は30.8cm、平均深度は19.1cm。建物の時期は中世に比定される。
- SB311 (第10図、図版7) 3地区の西側に位置し、SB310・SB312・SB313・SB315・SB316と重複する。規模は2間(4.2m)×1間(2.5m)、床面積10.5㎡。棟方向はN63°W。柱間は桁行2.6・1.6m、梁行2.5m。構成柱穴の平均径は36.5cm、平均深度は31.1cm。SB311-5から瓦質土器播鉢(16)、SB311-4から青磁碗(17)が出土した。建物の時期は中世に比定される。
- SB312 (第10図、図版7) 3地区の西側に位置し、SB310・SB311・SB313・SB314・SB315・SB316と重複する。規模は2間(4.3m)×1間(3.5m)、床面積15.1㎡。棟方向はN50°W。柱間は桁行2.3・2.0m、梁行3.5m。構成柱穴の平均径は34.1cm、平均深度は28.0cm。建物の時期は中世に比定される。
- SB313 (第10図、図版7) 3地区の西側に位置し、SB310・SB311・SB312・SB314・SB315・

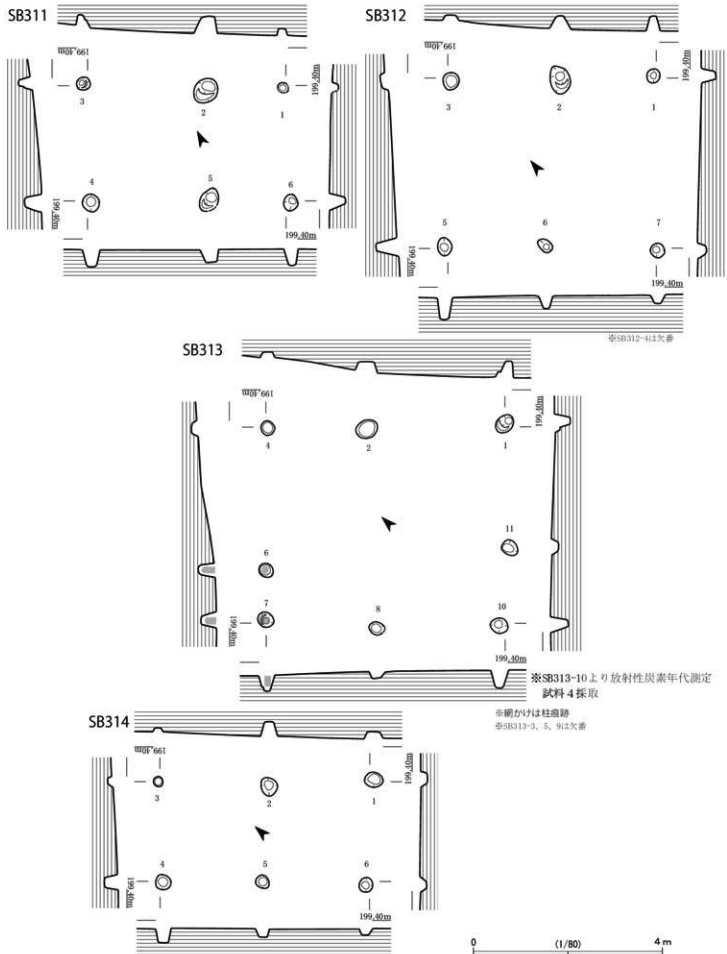


第8図 掘立柱建物実測図③



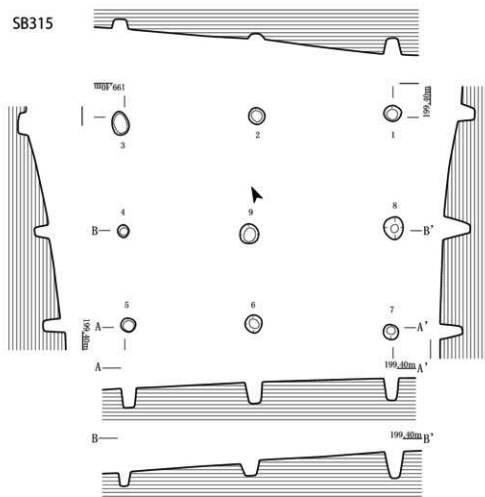
0 (1/80) 4m

第9図 掘立柱建物実測図④



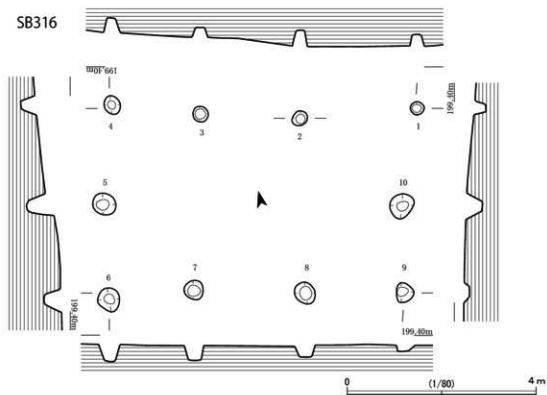
第10図 掘立柱建物実測図⑤

SB315

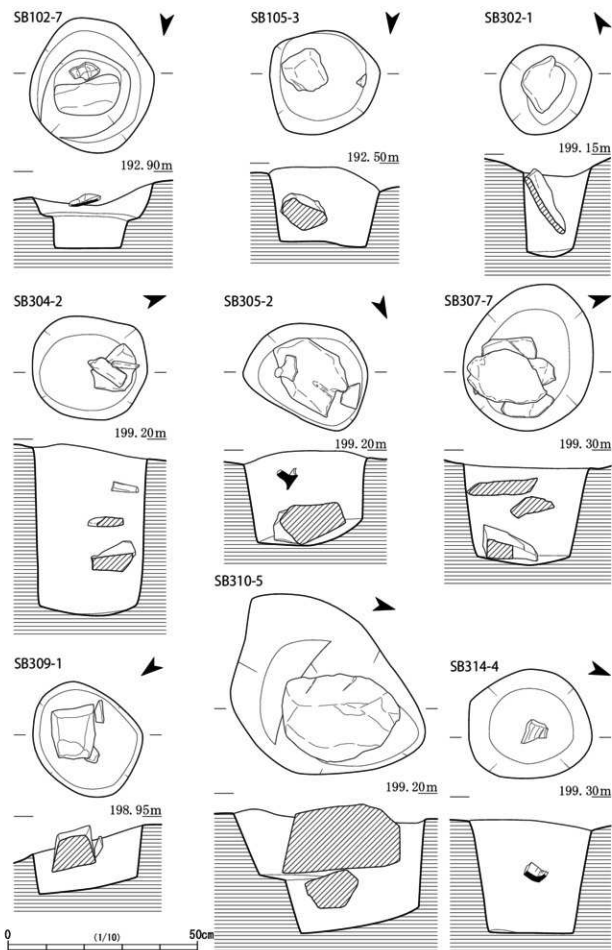


※SB315-3より放射性炭素年代測定試料5採取

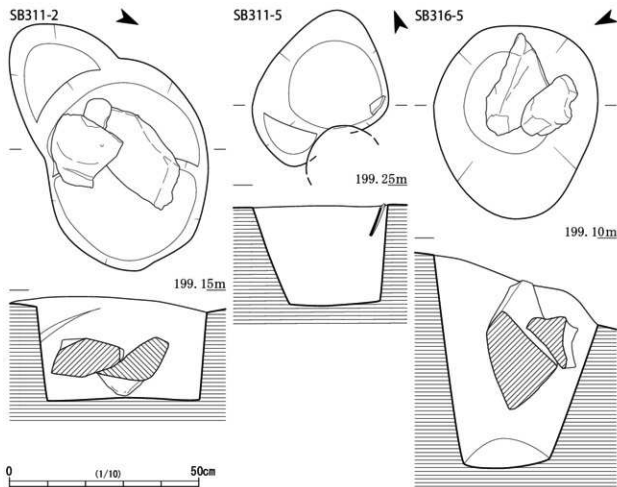
SB316



第 11 図 掘立柱建物実測図⑥



第12圖 掘立柱建物構成柱穴実測圖①



第13図 掘立柱建物構成柱穴実測図②

SB316と重複する。規模は2間(5.1m)×2間(4.1m)、床面積は20.9㎡。棟方向はN44°Wで、柱間は桁行2.1・3.0m、梁行3.0・1.1m。構成柱穴の平均径は34.1cm、平均深度は26.1cm。出土遺物の特徴とB313-10より採取した炭化物(試料4)の放射性炭素年代測定により、建物の時期は中世と推定される。SB314(第10図、図版7) 3地区の南西部に位置し、SB312・SB313・SB315・SB316と重複する。規模は2間(4.6m)×1間(2.1m)、床面積は9.7㎡。棟方向はN41°W。柱間は桁行2.3・2.3m、梁行2.1m。構成柱穴の平均径は30.4cm、平均深度は19.7cm。SB314-4から陶器壺(18)が出土した。建物の時期は中世に比定される。

SB315(第11図、図版7) 3地区の西側に位置し、SB310・SB311・SB312・SB313・SB314・SB316と重複する。規模は2間(5.8m)×2間(4.3m)の総柱建物で、床面積は24.9㎡。棟方向はN64°W。柱間は桁行2.9・2.9m、梁行2.3・2.0m。構成柱穴の平均径は35.5cm、平均深度は37.6cm。SB315-1から土師器皿か(19)、瓦質土器鍋(21)、SB315-8から土師器杯(20)、SB315-3から土師器鍋(22)、SB315-9から瓦質土器挿鉢(23)が出土した。出土遺物の特徴とSB315-3より採取した炭化物(試料5)の放射性炭素年代測定により、建物の時期は中世と推定される。

SB316(第11図、図版7) 3地区の西側に位置し、SB310・SB311・SB312・SB313・SB314・SB315と重複する。規模は3間(6.5m)×2間(4.1m)、床面積26.7㎡。棟方向N76°W。床面積は調査区最大の26.7㎡。柱間は桁行1.9・2.1・2.5m、梁行2.1・2.0m。構成柱穴の平均径は39.6cm、平均深度は31.9cm。SB316-3から土師器皿(24)が出土した。建物の時期は中世に比定される。

第1表 掘立柱建物一覧表

番号	地区	遺構番号	規模(間)	棟方向	柱 間		構成柱穴		出土遺物 ※番号は報告書掲載の 遺物番号	時代	備考	
					桁行	梁行	面積 (㎡)	平均径 (cm)				平均深さ (cm)
					建物の北西隅から(m)		建物の北西隅から(m)					
1	SB101	2×1	N84°E	3.9 (1.9・2.0)	1.8	7.0	32.1	31.9	土師器Ⅱ(1)・杯(2)	中世		
2	SB102	2×2	N88°E	5.5 (3.1・2.4)	3.6 (2.1・1.5)	19.8	36.6	18.6	土師器杯(3・4・5)	中世		
3	SB103	2×1	N82°E	4.0 (2.1・1.9)	2.3	9.2	29.5	16.8	土師器杯	中世		
4	SB104	2×1	N88°W	4.7 (3.3・1.4)	2.5	11.8	38.3	31.6	土師器杯(6・7・8・9)	中世		
5	SB105	2×2	N87°W	2.9 (1.5・1.4)	2.8 (1.4・1.4)	8.1	28.4	22.2	土師器Ⅱ(10)	中世		
6	SB301	1×1	N51°W	3.3	2.7	8.9	26.5	24.8	土師器杯	中世		
7	SB302	3×1	N64°W	3.8 (1.3・1.1・1.4)	φ2.5	9.5	23.1	17.6	土師器	中世	※北東隅から	
8	SB303	2×1	N51°W	3.3 (1.5・1.8)	1.7	5.6	19.4	12.8		-		
9	SB304	1×1	N52°W	3.0	3.0	9.0	26.1	20.6	土師器杯(11)・足跡(13)・ 瓦質土器鉢(12)	中世		
10	SB305	2×2	N64°W	4.5 (2.8・1.7)	4.0 (1.8・2.2)	18.0	23.8	20.3	土師器Ⅱ(14)・ 土師器足跡(15)	中世		
11	SB306	2×1	N59°W	3.8 (1.9・1.9)	3.5	13.3	23.1	12.6		-		
12	SB307	2×2	N54°W	3.8 (2.4・1.4)	φ2.8 (1.3・1.5)	10.6	26.4	15.2		-	※北東隅から	
13	SB308	2×2	N31°E	φ3.4 (1.5・1.9)	3.0 (1.6・1.4)	10.2	22.0	18.1	土師器	中世	※北東隅から	
14	SB309	2×2	N34°E	4.4 (1.4・3.0)	2.8 (1.5・1.3)	12.3	24.2	14.3	瓦質土器鉢	中世		
15	SB310	2×2	N52°W	4.8 (2.4・2.4)	3.5 (1.8・1.7)	16.8	30.8	19.1	土師器杯	中世		
16	SB311	2×1	N63°W	4.2 (2.6・1.6)	2.5	10.5	36.5	31.1	瓦質土器鉢鉢(16)・ 青磁碗(17)・土師器杯	中世		
17	SB312	2×1	N50°W	4.3 (2.3・2.0)	3.5	15.1	34.1	28.0	土師器	中世		
18	SB313	2×2	N44°W	5.1 (2.1・3.0)	4.1 (3.0・1.1)	20.9	34.1	26.1	土師器	中世		
19	SB314	2×1	N41°W	4.6 (2.3・2.3)	2.1	9.7	30.4	19.7	陶器壺(18)	中世		
20	SB315	2×2	N64°W	5.8 (2.9・2.9)	4.3 (2.3・2.0)	24.9	35.5	37.6	土師器Ⅱ(19)・杯(20)・罎(22)・ 鉢鉢、瓦質土器罎(21)・鉢鉢(23)	中世		
21	SB316	3×2	N76°W	6.5 (1.9・2.1・2.5)	4.1 (2.1・2.0)	26.7	39.6	31.9	土師器Ⅱ(24)	中世		

第2表 掘立柱建物構成柱穴一覧表

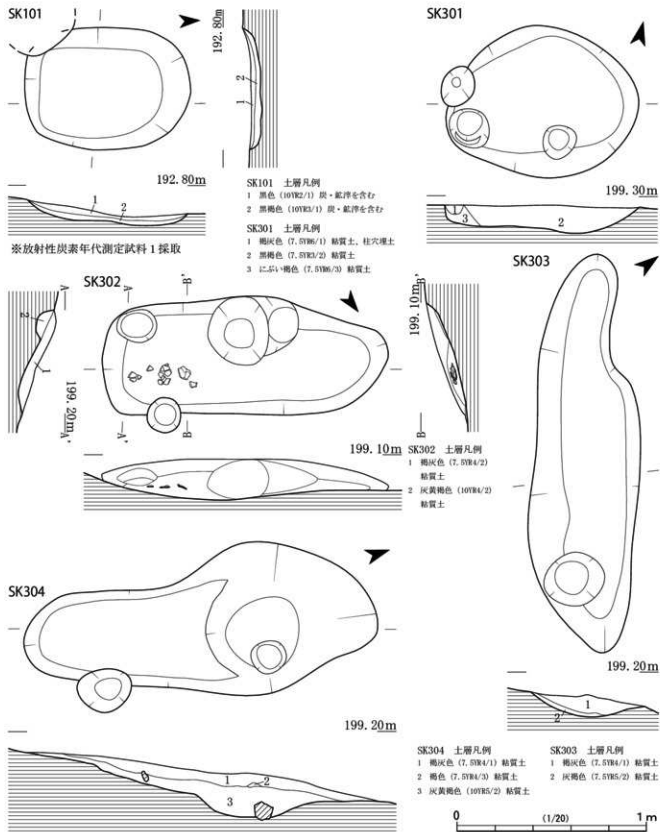
番号	地区	遺構番号	平面形状	規模(cm)				埋土	出土遺物 ※番号は報告書掲載の 遺物番号	時代	備考
				直径	長径 (残存数)	短径 (残存数)	深さ (残存数)				
1	SB101-1	楕円	-	34.0	22.0	22.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器Ⅱ	中世		
2	SB101-2	円	31.5	-	-	30.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世		
3	SB101-3	円	34.0	-	-	34.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器Ⅱ(1)・杯(2)	中世		
4	SB101-4	円	34.0	-	-	33.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
5	SB101-5	円	29.0	-	-	35.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
6	SB101-6	楕円	-	39.0	33.0	36.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
7	SB102-1	楕円	-	38.0	29.0	18.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
8	SB102-2	楕円	-	37.5	33.0	24.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
9	SB102-3	円	36.0	-	-	19.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世		
10	SB102-4	円	18.5	-	-	20.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
11	SB102-5	楕円	-	43.5	33.0	17.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	-	-		
12	SB102-6	円	60.0	-	-	10.0	灰黄褐色土(10YR5/2)	土師器杯(3・4)	中世		
13	SB102-7	円	34.5	-	-	21.0	褐色土(10YR4/4)	土師器杯(5)	中世		
14	SB103-1	円	28.0	-	-	7.0	褐色土(10YR4/4)	土師器	中世		
15	SB103-2	円	38.5	-	-	23.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	-	-		
16	SB103-3	円	32.0	-	-	17.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器杯	中世		
17	SB103-4	円	30.0	-	-	25.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む	-	-		
18	SB103-5	円	20.0	-	-	17.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
19	SB103-6	楕円	-	33.5	24.0	11.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世		
20	SB104-1	楕円	-	41.5	36.0	30.0	褐色土(10YR4/4) 炭を含む	土師器杯(8)	中世		
21	SB104-2	楕円	-	32.0	27.0	19.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
22	SB104-3	楕円	-	52.0	42.5	24.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	-	-		
23	SB104-4	円	39.0	-	-	47.0	褐色土(10YR4/4) 褐色ブロック・炭を含む	土師器杯(6・7)	中世		
24	SB104-5	円	27.5	-	-	18.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む	土師器杯(9)	中世		
25	SB104-6	楕円	-	56.0	39.0	50.5	褐色土(10YR4/4) 炭を含む	-	-		
26	SB105-1	円	28.0	-	-	36.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世		
27	SB105-2	円	17.5	-	-	15.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		
28	SB105-3	円	30.0	-	-	24.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	-	-		
29	SB105-4	円	24.5	-	-	10.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世		
30	SB105-5	円	42.0	-	-	40.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器Ⅱ(10)	中世		
31	SB105-6	楕円	-	40.0	36.0	16.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	-	-		
32	SB105-7	円	36.0	-	-	31.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-		

番号	地区	遺構番号	平面形状	規模(cm)				埋土	出土遺物 ※番号は報告書掲載の 遺物番号	時代	備考
				直径	長径 (残存値)	短径 (残存値)	深さ (残存値)				
33	1	SH105-8	円	200	-	-	17.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
34	1	SH105-9	円	200	-	-	8.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
35	3	SH301-1	円	27.5	-	-	33.0	褐色土(10YR4/4)		-	
36	3	SH301-2	円	25.5	-	-	31.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器杯	中世	
37	3	SH301-3	円	160	-	-	11.0	褐色土(10YR4/4)		-	
38	3	SH301-4	円	37.0	-	-	23.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
39	3	SH302-1	円	22.5	-	-	26.0	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
40	3	SH302-2	楕円	-	25.0	21.5	7.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
41	3	SH302-3	円	25.5	-	-	19.5	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
42	3	SH302-4	円	24.5	-	-	14.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
43	3	SH302-5	円	23.0	-	-	29.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
44	3	SH302-6	円	16.5	-	-	4.5	褐色土(10YR4/4) 灰黄褐色ブロック・炭を含む		-	
45	3	SH302-7	楕円	-	29.5	24.0	22.5	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む	土師器	中世	
46	3	SH303-1	楕円	-	22.0	19.0	13.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
47	3	SH303-2	円	17.5	-	-	14.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
48	3	SH303-3	円	16.0	-	-	20.0	褐色土(7.5YR4/3)		-	
49	3	SH303-4	円	16.5	-	-	8.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
50	3	SH303-5	円	21.5	-	-	14.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
51	3	SH303-6	円	24.5	-	-	7.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
52	3	SH304-1	円	31.5	-	-	13.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む		-	
53	3	SH304-2	楕円	-	31.5	28.0	44.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む	土師器杯(11)・瓦質土器 鉢(12)・土師器足縁(13)	中世	
54	3	SH304-3	円	18.0	-	-	13.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
55	3	SH304-4	楕円	-	28.5	22.0	12.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
56	3	SH305-1	楕円	-	21.5	16.0	23.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
57	3	SH305-2	楕円	-	34.5	28.5	63.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器足縁(15)	中世	
58	3	SH305-3	円	32.0	-	-	17.5	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
59	3	SH305-4	円	27.0	-	-	16.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
60	3	SH305-5	円	19.5	-	-	8.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
61	3	SH305-6	円	29.5	-	-	16.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む	瓦質土器鉢(14)	中世	
62	3	SH305-7	円	20.5	-	-	11.0	褐色土(10YR4/4)		-	
63	3	SH305-8	円	20.0	-	-	22.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
64	3	SH305-9	円	22.0	-	-	15.5	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
65	3	SH305-10	円	13.0	-	-	9.0	灰黄褐色土(10YR5/2)		-	
66	3	SH305-11	円	25.5	-	-	21.0	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
67	3	SH306-1	円	16.0	-	-	12.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む		-	
68	3	SH306-2	楕円	-	26.5	22.0	11.0	褐色土(7.5YR4/3)		-	
69	3	SH306-3	楕円	-	25.0	21.0	11.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
70	3	SH306-4	円	23.5	-	-	7.0	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
71	3	SH306-5	円	28.5	-	-	21.5	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
72	3	SH307-1	楕円	-	36.0	28.0	20.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
73	3	SH307-2	円	24.5	-	-	11.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
74	3	SH307-3	円	18.0	-	-	9.5	褐色土(10YR4/4)		-	
75	3	SH307-4	円	24.0	-	-	13.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ブロックを含む		-	
76	3	SH307-5	円	23.5	-	-	18.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
77	3	SH307-6	円	26.0	-	-	8.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 灰黄褐色ブロックを含む		-	
78	3	SH307-7	楕円	-	40.0	33.5	25.5	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
79	3	SH308-1	楕円	-	22.0	16.0	11.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
80	3	SH308-2	楕円	-	30.0	26.0	31.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
81	3	SH308-3	円	16.5	-	-	13.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
82	3	SH308-4	円	21.0	-	-	19.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ブロックを含む		-	
83	3	SH308-6	楕円	-	24.5	19.0	10.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
84	3	SH308-7	楕円	-	24.0	18.0	9.0	灰黄褐色土(10YR5/2)		-	
85	3	SH308-8	楕円	-	28.0	25.5	32.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
86	3	SH309-1	楕円	-	32.5	26.0	16.5	にぶい黄褐色土(10YR5/4)	瓦質土器鉢	中世	
87	3	SH309-2	円	22.5	-	-	10.5	褐色土(7.5YR4/3) 褐色ブロックを含む		-	
88	3	SH309-3	円	22.0	-	-	12.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	

番号	地区	遺構番号	平面形状	規模 (cm)				埋土	出土遺物 ※番号は報告書掲載の 遺物番号	時代	備考
				直径	長径 (残存値)	短径 (残存値)	深さ (残存値)				
89	3	SB309-4	円	22.5	-	-	14.5	褐色土(10YR4/4) 炭を含む		-	
90	3	SB309-6	円	26.0	-	-	20.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
91	3	SB309-7	楕円	-	24.5	20.0	10.0	褐色土(10YR4/4)		-	
92	3	SB309-8	円	22.0	-	-	14.5	灰黄褐色土(10YR5/2)		-	
93	3	SB309-9	円	27.0	-	-	16.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
94	3	SB310-1	楕円	-	24.0	19.5	15.5	褐色土(10YR4/4)		-	
95	3	SB310-2	円	20.0	-	-	12.0	灰黄褐色土(10YR5/2)		-	
96	3	SB310-3	円	38.5	-	-	28.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器杯	中世	
97	3	SB310-4	円	35.5	-	-	30.0	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む		-	
98	3	SB310-5	-	-	-	41.0	18.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
99	3	SB310-6	円	29.0	-	-	21.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
100	3	SB310-7	円	29.5	-	-	8.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
101	3	SB311-1	円	23.5	-	-	14.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
102	3	SB311-2	楕円	-	57.5	48.0	39.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器杯	中世	
103	3	SB311-3	円	28.5	-	-	29.5	灰黄褐色土(10YR5/2)		-	
104	3	SB311-4	円	36.0	-	-	35.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	青磁鉢(17)・土師器	中世	
105	3	SB311-5	楕円	-	53.5	37.0	29.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	瓦質土器椀鉢(16)	中世	
106	3	SB311-6	楕円	-	36.0	30.5	39.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
107	3	SB312-1	円	28.0	-	-	31.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
※	3	SB312-2	楕円	-	59.5	41.5	30.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	赤土師器	中世	※SB310-5と 切り合い関係
108	3	SB312-3	円	34.0	-	-	13.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
109	3	SB312-5	楕円	-	38.5	29.5	46.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
110	3	SB312-6	楕円	-	34.0	23.0	29.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
111	3	SB312-7	円	29.5	-	-	18.0	褐色土(7.5YR4/3)		-	
112	3	SB313-1	楕円	-	42.5	32.5	34.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
113	3	SB313-2	楕円	-	47.5	38.5	22.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む		-	
114	3	SB313-4	円	29.5	-	-	12.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
115	3	SB313-6	円	30.5	-	-	36.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	柱頭跡
116	3	SB313-7	円	33.5	-	-	33.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	柱頭跡
117	3	SB313-8	楕円	-	32.5	27.0	15.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む		-	
118	3	SB313-10	円	36.0	-	-	38.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 明褐色ブロックを含む		-	
119	3	SB313-11	楕円	-	35.5	30.0	17.5	褐色土(10YR4/4)		-	
120	3	SB314-1	楕円	-	40.0	32.0	14.5	灰黄褐色土(10YR5/2) 炭を含む		-	
121	3	SB314-2	楕円	-	38.0	34.5	32.0	褐色土(10YR4/4)		-	
122	3	SB314-3	円	21.5	-	-	10.0	褐色土(10YR4/4)		-	
123	3	SB314-4	円	32.5	-	-	30.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	陶器壺(18)	中世	
124	3	SB314-5	楕円	-	30.0	26.5	17.0	褐色土(10YR4/4)		-	
125	3	SB314-6	円	28.0	-	-	14.0	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
126	3	SB315-1	円	34.0	-	-	37.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器罐か(19)・瓦質土器 罎(21)	中世	
127	3	SB315-2	円	34.5	-	-	14.5	灰黄褐色土(10YR4/2)		-	
128	3	SB315-3	楕円	-	50.0	34.5	21.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器罎(22)・土師器椀鉢	中世	
129	3	SB315-4	円	24.5	-	-	30.5	褐色土(7.5YR4/3)		-	
130	3	SB315-5	円	30.5	-	-	47.0	褐色土(10YR4/4) 明褐色ブロックを含む		-	
131	3	SB315-6	円	36.5	-	-	44.5	褐色土(10YR4/4)		-	
132	3	SB315-7	円	32.0	-	-	47.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
133	3	SB315-8	楕円	-	47.5	40.0	57.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器杯(20)・瓦質土器	中世	
134	3	SB315-9	円	41.5	-	-	39.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	瓦質土器椀鉢(23)	中世	
135	3	SB316-1	円	26.5	-	-	24.5	褐色土(10YR4/4) 炭を含む		-	
136	3	SB316-2	円	30.5	-	-	36.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む		-	
137	3	SB316-3	円	34.0	-	-	23.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器罎(24)	中世	
138	3	SB316-4	楕円	-	40.0	34.0	33.5	褐色土(10YR4/4)		-	
139	3	SB316-5	円	48.5	-	-	57.0	灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色ブロック・炭を含む		-	
140	3	SB316-6	円	47.0	-	-	36.5	褐色土(10YR4/4)		-	
141	3	SB316-7	円	39.5	-	-	33.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む		-	
142	3	SB316-8	円	44.0	-	-	27.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む		-	
143	3	SB316-9	楕円	-	41.5	36.5	11.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む		-	
144	3	SB316-10	楕円	-	54.0	46.0	35.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 明褐色ブロックを含む		-	

(3) 土坑 (第5・14図 図版9)

今回の調査では5基の土坑を検出した。内訳は、1地区1基、3地区4基である。以下各土坑について述べる。



第14図 土坑実測図

SK101 (第5・14図、図版9) 1地区西側遺構密集区東端、SB101の北東に位置する。平面形は長径89.6cm、短径67.8cmの楕円形で、深さは14.4cmである。削平が著しい。土師器皿(25)・鉾津・炭化物が出土した。自然科学分析(IV章参照)の結果、鍛錬鍛冶と推定される。埋土は上層より黒色・黒褐色で炭を多く含む。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

なお、放射性炭素年代測定の結果は995～1024cal ADとなっている。詳細はIV章を参照されたい。

SK301 (第14図、図版9) 3地区東側遺構密集区中央に位置する。平面形は長径102.6cm、短径79.6cmの楕円形で、深さは15.0cmである。瓦質土器鍋(26)・土師器鉢(27)が出土した。埋土は上層より黒褐色・にぶい褐色の粘質土で、にぶい褐色のブロックを含む。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SK302 (第14図、図版9) 3地区東側遺構密集区中央、SK301の北西に位置する。平面形は長径151.7cm、短径58.2cmの楕円形で、深さは20.2cmである。土師器皿(28)・土師器杯(29・30)がまとまった状態で出土した。埋土は上層より褐灰色・灰黄褐色の粘質土で、炭を少量含む。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SK303 (第14図、図版9) 3地区西側遺構密集区東端に位置する。平面形は不整形で、長径210.6cm、短径56.0cm、深さは13.4cmである。埋土は上層より褐灰色・灰褐色の粘質土。出土遺物がなないため遺構の時期は不明である。

SK304 (第14図、図版9) 3地区西側遺構密集区東側、SK303の北西に位置する。平面形は不整形で、長径187.0cm、短径81.2cm、深さは34.2cmである。埋土下層に少数の礫を含む。埋土は上層より褐灰色・褐色・灰黄褐色の粘質土。出土遺物から中世の遺構と比定される。

第3表 土坑一覧表

地区	遺構番号	平面形	主軸方位	規模(cm)			埋土	出土遺物	時代
				長径	短径	深さ			
3	SK101	楕円	N3°E	89.6	67.8	14.4	1 黒色(10YR2/1)炭・鉾津を含む 2 黒褐色(10YR3/1)炭・鉾津を含む	土師器皿(25)	中世
	SK301	楕円	N77°E	102.6	79.6	15.0	1 褐灰色(7.5YR6/1)粘質土、柱穴埋土 2 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土 3 にぶい褐色(7.5YR6/3)粘質土	瓦質土器鍋(26) 土師器鉢(27)	中世
	SK302	楕円	N52°W	151.7	58.2	20.2	1 褐灰色(7.5YR4/2)粘質土、炭を少量含む 2 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土、柱穴埋土	土師器皿(28) 土師器杯(29・30)	中世
	SK303	不整形	N54°W	210.6	56.0	13.4	1 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土 2 灰褐色(7.5YR5/2)粘質土	-	-
	SK304	不整形	N18°E	187.0	81.2	34.2	1 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土 2 褐色(7.5YR4/3)粘質土 3 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土	土師器・瓦質土器	中世

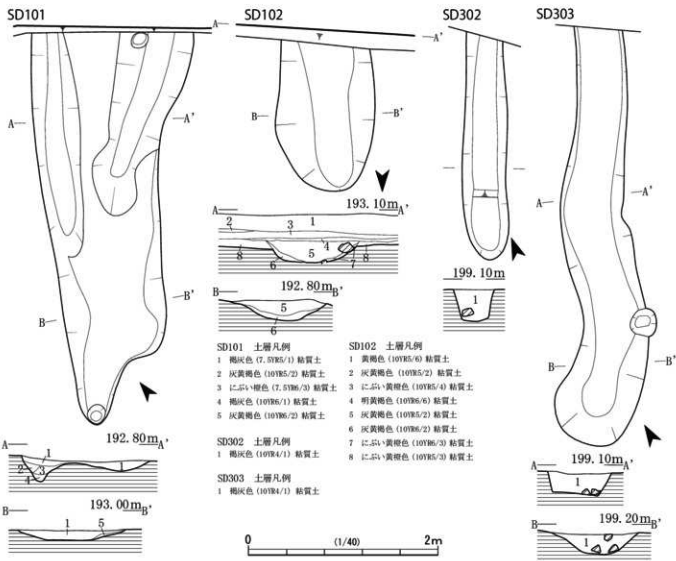
※埋土の数字は第14図の土層凡例に従う

(4) 溝(第5・15図、図版9・10)

調査区全体で6条の溝を検出した。内訳は1地区2条、3地区4条である。このうち代表的な4条について述べる。

SD101 (第5・15図、図版9) 1地区東側で南北に伸びる溝である。検出部分の平面形は、長さ414cm、幅173cmで、深さは28cmである。流路に沿って北東側と北西側に分流する。埋土は上層より褐灰色・灰黄褐色・にぶい橙色・褐灰色・灰黄褐色の粘質土。堆積の状況から北西側の流路が初期の溝であり、後に流れによって拡幅したものと考えられる。埋土から皿ではないかとみられる土師器(31)と瓦質土器鍋(32)が出土した。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SD102 (第5・15図、図版9) 1地区西側で南北に伸びる溝である。検出部分の平面形は、長さ156cm、



第15図 溝実測図

幅104cmで、深さは22cmである。埋土は上層より灰黄褐色・灰黄褐色・にぶい黄褐色の粘質土で、明褐色ブロックと炭を含む。埋土から瓦質土器鍋 (33) が出土した。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SD101とともに、1地区の東側・西側範囲の区画溝あるいは排水施設として機能していたと推定される。

第4表 溝一覧表

地区	遺構番号	規模 (cm)			埋土	出土遺物	時代	備考
		長さ	幅	深さ				
1	SD101	414	173	28	1 褐色 (7.5YR5/1) 粘質土、炭・マンガンを含む 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 3 にぶい褐色 (7.5YR6/3) 粘質土、炭を少量含む 4 褐色 (10YR6/1) 粘質土 5 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土	土師器皿か(31) 瓦質土器鍋(32)	中世	
	SD102	156	104	22	5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土、明褐色ブロック・炭を含む 6 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土、明褐色ブロックを含む 7 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質土、明褐色ブロックを含む	瓦質土器鍋(33)	中世	
3	SD301	114	45.5	7	褐色 (10YR4/1) 粘質土、炭・マンガン・礫を含む	土師器	中世	
	SD302	235	46	34	褐色 (10YR4/1) 粘質土、炭・礫を含む	-	-	下層より湧水
	SD303	445	39	25.5	褐色 (10YR4/1) 粘質土、炭・礫を含む	土師器・瓦質土器	中世	下層より湧水
	SD304	126	28	11	褐色 (10YR4/1) 粘質土、礫を含む	-	-	

※埋土の数字は第15図の土層凡例に従う

SD302 (第5・15図、図版10) 3地区東側で南北に伸びる溝である。検出部分の平面形は、長さ235cm、幅46cmで、深さは34cmである。埋土は褐色の粘質土で、炭と礫を含む。下層より湧水がみられる。出土遺物がないため時期は不明である。

SD303 (第5・15図、図版10) 3地区東側、SD302に近接し、南北に伸びる溝である。検出部分の平面形は、長さ445cm、幅39cmで、深さは25.5cmである。埋土は褐色の粘質土で、炭・礫を含む。下層より湧水がみられる。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

(5) 柱穴 (第5・16図、図版10)

今回の調査では、掘立柱建物を構成するものを含む約513個の柱穴が検出された。内訳は、1地区150個、2地区36個、3地区327個である。全地区ともに後世の削平を受けており、浅いものが多い。以下、掘立柱建物構成柱穴として記述したものを以外で代表的なものを取り上げる。

SP1005 (第5・16図、図版10) 1地区東側、SD101の東隣に位置する。平面形は長径31.0cm、短径25.0cmの楕円形を呈し、深さは15.5cmである。埋土中層からほぼ完形の土師器皿(34)が出土した。また埋土下層から石・角礫が検出された。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SP1021 (第5・16図、図版10) 1地区西側遺構密集区の東側、構成柱穴SB102-1の西側に位置する。平面形は直径38.0cmのほぼ完全な円形を呈し、深さは37.5cmである。埋土上層から下層にかけて、最大25cm程度の石が検出された。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SP1025 (第5・16図) 1地区西側遺構密集区中央部、SB103内北側に位置する。平面形は長径56.0cm、短径46.0cmの楕円形を呈し、深さは38.0cmである。埋土から土師器皿(40)・土師器杯(41・42)が出土した。また埋土上層から石・角礫が検出された。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

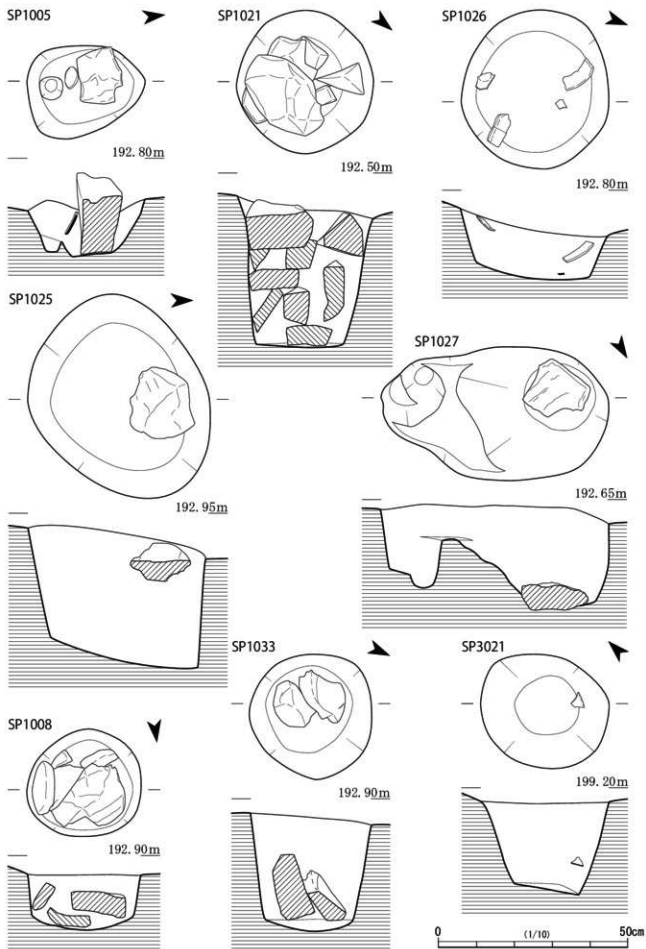
SP1026 (第5・16図、図版10) 1地区西側遺構密集区中央部、SB103内北西側に位置する。SP1025に近接する。平面形は直径42.0cmのほぼ完全な円形を呈し、深さは19.0cmである。埋土から土師器杯(43・44)・土師器鉢(45・46)が出土した。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SP1027 (第5・16図) 1地区西側遺構密集区中央部、SB103の北西に位置する。平面形は長径推定37.0cm、短径35.5cmの楕円形を呈し、深さは27.0cmである。南東に隣接する柱穴との先後関係は不明である。埋土中から土師器皿(47・48・49・50)・土師器杯(51・52・53)が出土した。また、埋土下層から石・角礫が検出された。出土遺物より、中世の遺構と比定される。

SP1033 (第5・16図、図版10) 1地区西側遺構密集区東側、SB102の南東に位置する。平面形は直径32.5cmのほぼ完全な円形を呈し、深さは31.0cmである。埋土下層から石・角礫が検出された。出土遺物がないため遺構の時期は不明である。

SP1008 (第5・16図、図版10) 1地区西側遺構密集区中央部、SB103内西側に位置する。平面形は直径30.0cmのほぼ完全な円形を呈し、深さは30.0cmである。埋土中に最大20cm程度の石が検出された。出土遺物がないため遺構の時期は不明である。

SP3021 (第5・16図、図版10) 3地区東側遺構密集区、SB301内中央部に位置する。平面形は長径34.0cm、短径30.0cmの楕円形を呈し、深さは24.5cmである。埋土下層から白磁か陶器の椀(58)が出土した。出土遺物より、中世の遺構と比定される。



第 16 圖 柱穴実測図

第5表 柱穴一覧表

番号	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			埋土	出土遺物	時代	備考	
				直径	長径 (残存値)	短径 (残存値)					高さ (残存値)
1	1	SP1001	楕円	-	28.0	23.5	32.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
2	1	SP1002	円	20.5	-	-	21.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器杯	中世	
3	1	SP1003	楕円	-	18.0	13.5	8.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器杯	中世	
4	1	SP1004	楕円	-	38.0	29.0	4.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器杯	中世	
5	1	SP1005	楕円	-	31.0	25.0	15.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器皿(34)	中世	石・角礫検出
6	1	SP1006	円	30.0	-	-	10.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器杯	中世	
7	1	SP1007	円	49.0	-	-	16.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器皿	中世	
8	1	SP1008	円	30.0	-	-	30.0	褐色土(10YR4/4)	-	-	石・角礫検出
9	1	SP1009	円	-	47.0	-	10.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
10	1	SP1010	円	51.0	-	-	30.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器皿(35)・土師器杯	中世	
11	1	SP1011	-	-	(23.0)	(40.5)	(20.0)	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器	中世	
12	1	SP1012	円	27.0	-	-	11.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器杯・瓦質土器楕鉢	中世	
13	1	SP1033	円	26.0	-	-	31.0	褐色土(10YR4/2) 褐灰色ブロック・炭を含む	土師器杯	中世	
14	1	SP1014	楕円	-	26.0	21.5	13.5	褐色土(10YR4/4)	土師器	中世	
15	1	SP1015	楕円	-	32.5	27.0	22.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器皿(36)	中世	
16	1	SP1016	楕円	-	25.0	21.5	7.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
17	1	SP1017	楕円	-	57.5	45.0	43.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器杯(37)	中世	
18	1	SP1018	円	27.5	-	-	28.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
19	1	SP1019	円	43.5	-	-	35.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器杯(38)・土師器皿	中世	
20	1	SP1020	楕円	-	20.0	16.0	17.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	青組輪(39)	中世	
21	1	SP1021	円	38.0	-	-	37.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器・炭	中世	石・角礫検出
22	1	SP1022	楕円	-	34.5	29.0	47.0	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
23	1	SP1023	楕円	-	40.0	32.0	22.0	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロック・炭を含む	土師器	中世	
24	1	SP1024	円	35.0	-	-	27.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ブロックを含む	土師器・炭	中世	
25	1	SP1025	楕円	-	56.0	46.0	38.0	褐色土(10YR4/4) 炭を含む	土師器皿(40)・土師器杯(41・42)・炭	中世	石・角礫検出
26	1	SP1026	円	42.0	-	-	19.0	褐色土(10YR4/4) 炭を含む	土師器杯(43・44)・土師器鉢(45・46)・炭	中世	
27	1	SP1027	楕円	-	(37.0)	33.5	27.0	褐色土(10YR4/4)	土師器皿(47・48・49・50)・土師器杯(51・52・53)・炭	中世	石・角礫検出
28	1	SP1028	楕円	-	61.5	25.0	15.5	灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色ブロックを含む	土師器	中世	
29	1	SP1029	楕円	-	45.0	36.0	48.5	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
30	1	SP1030	円	27.0	-	-	19.5	褐色土(10YR4/4) 炭を含む	土師器・焼土塊	中世	

番号	地区	遺構番号	平面形	規模(cm)				埋土	出土遺物	時代	備考
				直径	長径 (残存値)	短径 (残存値)	深さ (残存値)				
31	1	SP1031	円	200	-	-	155	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世	
32	1	SP1032	円	425	-	-	280	褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
33	1	SP1033	円	325	-	-	310	灰黄褐色土(10YR4/2)	-	-	
34	2	SP2001	円	340	-	-	210	灰黄褐色土(10YR5/2) 炭を含む	土師器	中世	
35	2	SP2002	楕円	-	300	240	135	灰黄褐色土(10YR5/3) 炭を含む	土師器・青磁碗(鍋蓋弁文)	中世	
36	2	SP2003	楕円	-	450	300	410	灰黄褐色土(10YR4/2)	瓦質土器鉢・炭	中世	
37	2	SP2004	円	300	-	-	195	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
38	2	SP2005	楕円	-	260	215	165	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	青磁碗(54)・瓦質土器	中世	
39	3	SP3001	楕円	-	310	270	340	灰黄褐色土(10YR4/2)	瓦質土器	中世	
40	3	SP3002	円	38.5	-	-	380	灰黄褐色土(10YR4/2) マンガンを含む	磁器鉢(55)	中世	
41	3	SP3003	円	25.5	-	-	215	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器	中世	
42	3	SP3004	-	-	(245)	(110)	100	褐色土(7.5YR4/3)	瓦質土器	中世	
43	3	SP3005	円	24.5	-	-	405	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世	
44	3	SP3006	円	340	-	-	290	灰黄褐色土(10YR5/2)	土師器鉢か(56)・瓦質土器	中世	
45	3	SP3007	楕円	-	190	170	80	褐色土(10YR4/4)	土師器	中世	
46	3	SP3008	円	260	-	-	255	灰黄褐色土(10YR4/2)	瓦質土器	中世	
47	3	SP3009	楕円	-	330	280	225	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世	
48	3	SP3010	円	190	-	-	65	灰黄褐色土(10YR4/2)	陶器	-	
49	3	SP3011	円	300	-	-	190	灰黄褐色土(10YR4/2)	瓦質土器	中世	
50	3	SP3012	円	200	-	-	170	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	土師器	中世	
51	3	SP3013	楕円	-	360	300	450	灰黄褐色土(10YR4/2)	炭・木片	-	
52	3	SP3014	円	370	-	-	490	灰黄褐色土(10YR4/2) 炭を含む	炭	-	
53	3	SP3015	-	-	(330)	(180)	(220)	灰黄褐色土(10YR4/2)	土師器皿	中世	
54	3	SP3016	楕円	-	405	305	480	灰黄褐色土(10YR4/2) 明褐色フロック・炭を含む	粘土塊	-	
55	3	SP3017	楕円	-	375	280	315	褐色土(10YR4/4) 明褐色フロック・炭を含む	-	-	石・角礫検出
56	3	SP3018	円	325	-	-	425	褐色土(10YR4/4)	木片	-	
57	3	SP3019	円	390	-	-	310	褐色土(10YR4/4)	土師器杯か(57)・炭	中世	
58	3	SP3020	楕円	-	270	220	205	灰黄褐色土(10YR5/2)	土師器	中世	
59	3	SP3021	楕円	-	340	300	245	灰黄褐色土(10YR4/2)	白磁か陶器鉢(58)	中世	

2 遺物

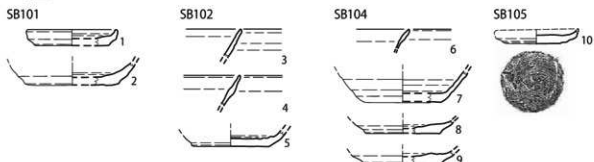
調査の結果、掘立柱建物・土坑・溝・柱穴などの遺構に伴う遺物のほかに、遺構検出時や遺構以外の客土層などから一定量の遺物が出土している。主な遺物の種類は、中世の室町時代（14～16世紀）の土師器（皿・杯・鍋・足鍋・羽釜・鉢）、瓦質土器（鍋・足鍋・插鉢・鉢・火鉢）、陶器の備前焼（壺）、13～16世紀代の中国産輸入磁器（青磁・白磁・青花）等である。縄文時代の石鏃も出土した。遺物は破片が多く、出土点数は多いとはいえないが、遺跡の規模や中山間地という立地環境に比して、青磁を主体とした中国産輸入磁器が一定数量出土していることが特徴的である。

なお、各遺物の法量や調整・特徴などについては、遺物観察一覧表に一括して掲載した。

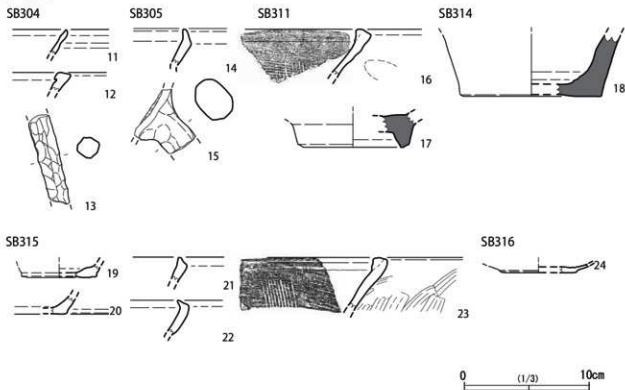
(1) 掘立柱建物出土遺物（第17図、図版11・12）

1～10は1地区の掘立柱建物からの出土遺物である。1は土師器皿、2は土師器杯でSB101出土。3～5はSB102出土の土師器杯。6～9はSB104出土の土師器杯。杯はいずれも底径6cmを超えたや

1 地区



3 地区



第17図 掘立柱建物出土遺物実測図

や厚い底で、体部の器壁は薄い。10はSB105出土の土師器皿で底部回転糸切り。

11～24は3地区の掘立柱建物からの出土遺物である。11～13はSB304出土。11は土師器杯。12は瓦質土器鉢。13は土師器足鍋脚部。14～15はSB305出土。14は瓦質土器鍋。岩崎編年（岩崎1999、P38表下の文献）Ⅲ新形式で15世紀後半。15は土師器足鍋脚部。16～17はSB311出土。16は瓦質土器鉢。17は青磁碗。ケズリ出し高台で、外底は無軸。龍泉窯系で14世紀代。18はSB314出土の陶器壺で備前焼。19～23はSB315出土。19は土師器皿か。20は土師器杯で、底部回転糸切り。21は瓦質土器鍋。岩崎編年Ⅲ古型式で15世紀前半～中頃か。22は土師器鍋。岩崎編年Ⅳ型式で15世紀後半～16世紀。23は瓦質土器鉢。24はSB316出土の土師器皿。底径6.0cmで、底部器壁が薄い。

(2) 土坑出土遺物（第18図、図版12）

25は鉾澤が出土したSK101から出土の土師器皿で、底部回転糸切り。26は瓦質土器鍋、27は土師器鉢と考えられ、SK301出土。28は器高1.4cmでやや高い土師器皿、29・30は土師器杯でSK302出土。29は底部回転糸切り。30は内湾気味で器壁が厚く、器高も高く14世紀代とみられる。

(3) 溝出土遺物（第18図、図版12）

31は土師器皿か。底部回転糸切り。32は瓦質土器鍋で、ともにSD101出土。33はSD102出土の瓦質土器鍋。ともに岩崎編年Ⅲ新形式に相当し、15世紀後半。

(4) 柱穴出土遺物（第18図、図版13・14）

34～53は1地区の柱穴出土遺物。34はSP1005出土、35はSP1010出土でともに底部回転糸切りの土師器皿。36はSP1015出土の土師器皿。37はSP1017出土の土師器杯。38はSP1019出土の土師器杯。底部回転糸切り。39はSP1020出土の青磁碗。外面に蓮弁文様の一部が確認される。龍泉窯系で13世紀代の所産。40～42はSP1025出土。40は土師器皿、底部回転糸切り。41・42は土師器杯。ともに器壁が薄く、時期が下る要素がある。43～46はSP1026出土。43・44は土師器杯で、44は底部回転糸切り。45・46は土師器鉢。47～53はSP1027出土。47～50は土師器皿。48・49は復元口径5.6cm、器高0.95、1.1cmの小型品で底部回転糸切り。50は復元口径7.2cm、器高0.7cmでやや大きく浅い。51～53は土師器杯。54は2地区のSP2005から出土した青磁碗の口縁部破片。外面に線状に退化した蓮弁文様が施されている。龍泉窯系で16世紀代。55～58は3地区の柱穴出土遺物。55は磁器碗。56は土師器鉢か。57は土師器杯か。底部回転糸切り。58は白磁碗とみられるが、胎土には黒色砂粒を少量含み、生地の断面から見て、陶器の可能性もある。内外面に施軸が認められるが、外面は一部焼成時の軸飛びが見受けられる。

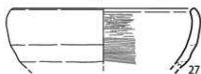
(5) 遺構に伴わない出土遺物（第19・20図、図版14～16）

59～68は1地区出土。59・60は土師器皿とみられる。底部回転糸切り。61・62は土師器杯。63・64は瓦質土器鍋。65は瓦質土器火鉢。「*」状の印文が連続して施された口縁部周囲の破片と考えられる。66は青磁の小壺か。口縁上端部の平坦面中央は軸剥げが認められる。67・68は外面に退化した蓮弁文様が刻まれた龍泉窯系の青磁碗。67は16世紀代、68は15世紀末の時期に比定される。69～75は2地区出土。69・70は瓦質土器鍋。71は瓦質土器火鉢。巴文（推定印文径2.2cm）が連続的に刻印された口縁部周囲の部位の破片とみられる。72は青磁蓋と推定される。外面のみに施軸され、貫入があり、内面は露胎。国産磁器の蓋物ではないかと考えられる。73・74は青磁碗。73はケズリ出し高

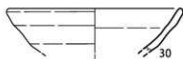
土坑
SK101



SK301

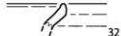


SK302



溝

SD101



SD102



柱穴
1 地区

SP1005



SP1017



SP1020



SP1025



SP1010



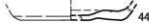
SP1019



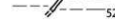
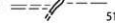
SP1015



SP1026



SP1027



2 地区

SP2005



3 地区

SP3002



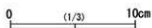
SP3006



SP3019

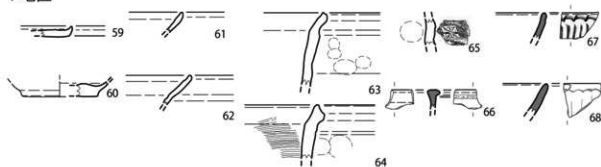


SP3021

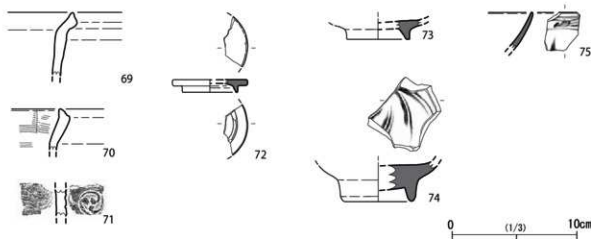


第 18 图 土坑·溝·柱穴出土遺物実測図

1 地区



2 地区

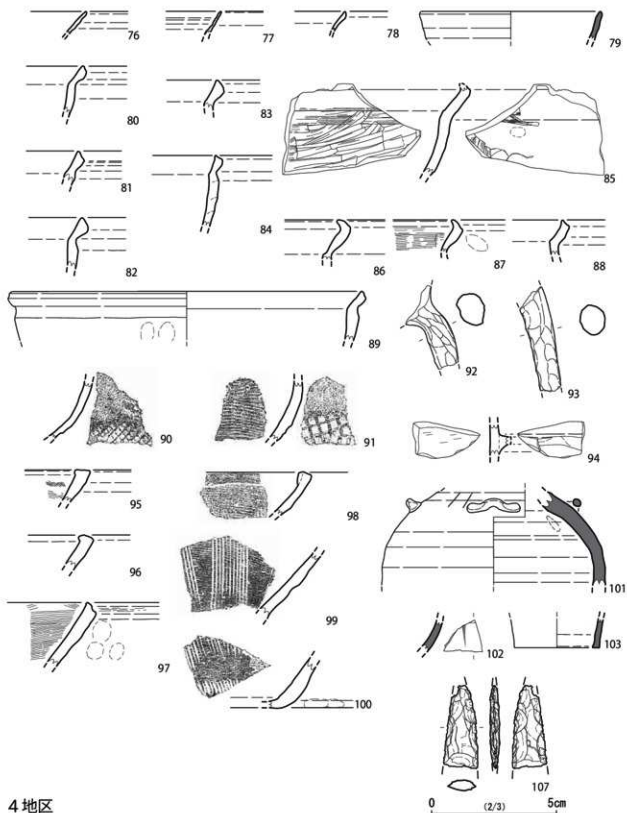


第 19 図 遺構に伴わない出土遺物実測図①

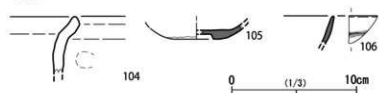
台で、高台内外面・疊付無軸。貫入がある。龍泉窯系で13世紀に時期比定される。74は内面見込みにヘラ描き文様が施されている。ケズリ出し高台内は無軸で、鉄分が褐色に発色している。龍泉窯系で14世紀代とみられる。75は磁器椀で、景德鎮産の青花（染付）である。外面に呉須による文様が描かれ、内外面に貫入がある。15世紀終～16世紀の所産とみられる。

76～103は3地区出土。76～78は土師器杯の口縁部破片。器壁が薄い。79は青磁椀の口縁部。龍泉窯系で13世紀代。80～93は土師器・瓦質土器の鍋および足鍋。80～84・89は岩崎福年Ⅲ古型式（15世紀前半～中頃）、85～87はⅣ型式（15世紀後半～16世紀代）、88はⅢ新型式（15世紀後半）とみられる。90・91の底部外面には格子目タタキの痕跡があり、煤が付着。94は土師器の羽釜の罅部破片。14世紀代の所産と考えられる。95～97は鉢。95・97は瓦質土器、96は土師器。98～100は瓦質土器の挿鉢。100は使用により内面のオロシ目の一部が摩滅している。101は陶器壺で耳が付く。備前焼の四耳壺とみられる。102・103は中国産青磁。102は青磁椀の体部破片で、外面に鎬蓮弁文様の一部と見られる施文が認められる。龍泉窯系で13世紀代と推定される。103は中国産輸入青磁と思われる。器種は不明であるが、器面端部を接地面と見て図化した。104～106は4地区出土。104は瓦質土器鍋。105は白磁で、碁笥底の皿か。高台のケズリ出し部は露胎で、内面は施軸。明代の昌武窯産に類似する。15世紀代の製品。106は国産の近世染付磁器椀の口縁部破片とみられる。107は3地区の客土中から出土したササカイト製の石鏝。形状から縄文時代の所産と考えられる。なお、図版16に掲載した108はSK101から出土した鉾津群で、鍛錬鍛冶により生じたものと鑑定された。

3 地区



4 地区



第 20 図 遺構に伴わない出土遺物実測図②

第6表 遺物観察一覧表

土器・陶磁器観察一覧表

番号	採掘区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考
					口径 (現存値)	器高 (現存値)	底径 (現存値)					
1	17 11	SB1013	土器器	皿	(6.8)	1.3	(5.8)	やや密	やや良	灰白色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に1mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
2	17 11	SB1013	土器器	杯	-	(1.8)	(7.4)	やや密	やや良	褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5mm程度の長石を少量含む
3	17 11	SB1026	土器器	杯	-	(2.3)	-	密	やや良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向左 胎土に0.5mm程度の長石・くさり礫を少量含む
4	17 11	SB1026	土器器	杯	-	(2.35)	-	やや密	やや良	にぶい黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
5	17 11	SB1027	土器器	杯	-	(1.3)	6.2	やや密	やや良	灰白色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロクロ回転方向左 胎土に0.5～2mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
6	17 11	SB1044	土器器	杯	-	(1.5)	-	密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5mm程度の長石・石英を少量含む
7	17 11	SB1044	土器器	杯	-	(2.5)	(6.2)	やや密	やや良	にぶい黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向右 胎土に0.5mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
8	17 11	SB1041	土器器	杯	-	(1.0)	(6.0)	密	やや良	浅黄褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5mm程度の長石を少量含む
9	17 11	SB1045	土器器	杯	-	(1.0)	(6.0)	密	やや良	褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向右 胎土に0.5mm程度の長石を少量含む
10	17 11	SB1055	土器器	皿	-	(1.1)	5.0	やや密	やや良	にぶい褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 底部外側に黒点を有す 胎土に0.5～1mm程度の長石・くさり礫を含む
11	17 11	SB3042	土器器	杯	-	(1.95)	-	密	良好	浅黄褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向右 胎土に0.5mm程度の長石・くさり礫を含む
12	17 11	SB3042	瓦葺土器	鉢	-	(1.5)	-	粗	やや良	灰白色 黄褐色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に1mm程度の長石・石英・雲母を含む
13	17 11	SB3042	土器器	足罎	-	(7.1)	-	やや粗	やや良	浅黄褐色 褐色	指頭による整形	断面中央部陶灰色 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英を多く含む
14	17 11	SB3056	瓦葺土器	鍋	-	(2.9)	-	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に1mm程度の長石・石英を含む 羽輪編年Ⅷ新形式(15世紀後半)
15	17 11	SB3052	土器器	足罎	-	(5.1)	-	やや密	やや良	褐色 褐色	ハケ目・指オサエ 指頭による整形	胎土に1～2mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
16	17 11	SF3115	瓦葺土器	摺鉢	-	(3.85)	-	粗	良好	灰色 灰白色	ハケ目・オロシ目・ヨコナデ ヨコナデ・指オサエ	胎土に1mm程度の長石・石英を多く含む
17	17 11	SB3114	青磁	碗	-	(2.7)	(8.0)	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰白色	不明瞭。抽輪 ケズリ出し後抽輪	ケズリ出し高台 高台部分を含め外底無釉 胎土に0.5mm以下の黒色塵粒を少量含む 慶長窯(14世紀)
18	17 11	SB3144	陶器	壺	-	(4.9)	(11.0)	やや粗	良好	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	磨前焼 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英を多く含む
19	17 12	SB3151	土器器	皿か	-	(1.0)	(6.0)	密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	全体摩滅 胎土に0.5～1mm程度のくさり礫・雲母を少量含む
20	17 12	SB3158	土器器	杯	-	(1.4)	-	密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・くさり礫・雲母を含む
21	17 12	SB3151	瓦葺土器	鍋	-	(2.0)	-	やや粗	良好	灰白色 陶灰色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・雲母を含む 羽輪編年Ⅷ古型式(15世紀前半～中頃)
22	17 12	SB3153	土器器	鍋	-	(2.7)	-	粗	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・塵粒を多く含む 羽輪編年Ⅷ型式(15世紀後半～16世紀)
23	17 12	SB3159	瓦葺土器	摺鉢	-	(4.2)	-	やや粗	良好	灰白色 灰白色	ヨコナデ・ハケ目・オロシ目 ヨコナデ・ハケ目・オサエ	胎土に1～2mm程度の長石・石英を含む
24	17 12	SB3163	土器器	皿	-	(0.7)	(6.0)	やや密	良好	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向右 胎土に1mm程度の長石・石英を含む
25	18 12	SK101	土器器	皿	(6.6)	0.9	5.6	密	良好	灰黄褐色 黒褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 胎土に0.5～1mm程度の長石・くさり礫・雲母を少量含む
26	18 12	SK301	瓦葺土器	鍋	-	(4.3)	-	やや密	良好	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・角閃石を含む 羽輪編年Ⅷ新形式(15世紀後半)
27	18 12	SK301	土器器	鉢か	(14.4)	(4.7)	-	密	良好	にぶい黄褐色 灰白色	ハケ目後回転ナデ 回転ナデ	遺物番号26と同一個体又同一器種か 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英を少量含む
28	18 12	SK302	土器器	皿	(6.4)	1.4	(4.2)	密	良好	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
29	18 12	SK302	土器器	杯	-	(2.3)	(6.2)	やや密	良好	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロクロ回転方向右 胎土に0.5～2mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
30	18 12	SK302	土器器	杯	(13.6)	(3.5)	-	やや密	良好	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5～1mm程度の長石・角閃石・くさり礫を含む
31	18 12	SD101	土器器	皿か	-	(1.0)	(5.0)	密	やや良	褐色 明黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロクロ回転方向右 胎土に1mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
32	18 12	SD101	瓦葺土器	鍋	-	(2.05)	-	粗	良好	灰白色 陶灰色	ハケ目後ヨコナデ・フミナデ ヨコナデ・フミナデ	胎土に1mm程度の石英を多く含む 羽輪編年Ⅷ新形式(15世紀後半)
33	18 12	SD102	瓦葺土器	鍋	-	(3.0)	-	粗	良好	浅黄褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ・フミナデ ヨコナデ・フミナデ	胎土に0.5～1mm程度の長石・石英を多く含む 羽輪編年Ⅷ新形式(15世紀後半)
34	18 13	SP1005	土器器	皿	5.8	0.9	4.4	やや密	良好	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
35	18 13	SP1010	土器器	皿	-	(0.95)	-	やや密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロクロ回転方向右 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
36	18 13	SP1015	土器器	皿	-	1.1	-	密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向右 磨り上げ磨き整形 胎土に0.5mm以下の長石・くさり礫・雲母を少量含む
37	18 13	SP1017	土器器	杯	-	(2.7)	-	やや密	やや良	浅黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転方向左 外側に黒点を有す 胎土に0.5～1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む

番号	種別	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
38	18	13	SP1019	土師器	杯	-	(1.4)	-	やや密	やや良	にぶい黄褐色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 内面に黒炭を有す 全体厚減 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
39	18	13	SP1030	青磁	椀	-	(2.0)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:オリーブ灰色	不明瞭・輪軸 後輪軸	外面に黒澤弁文様 龍泉窯(13世紀代)
40	18	13	SP1025	土師器	皿	(6.2)	0.85	(6.0)	やや密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロク口回転方向左 胎土に0.5mm程度の長石・くさり礫を含む
41	18	13	SP1025	土師器	杯	-	(2.0)	-	密	やや良	浅黄褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向右 全体厚減 胎土:0.5-1mm程度の長石・くさり礫・雲母を含む
42	18	13	SP1025	土師器	杯	-	(2.9)	(7.0)	密	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向右 胎土:0.5-1mm程度の長石・くさり礫・雲母を含む
43	18	13	SP1026	土師器	杯	-	(1.7)	(6.0)	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向右 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
44	18	13	SP1036	土師器	杯	-	(1.1)	(8.0)	密	やや良	褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロク口回転方向左 角四角に黒炭を有す 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
45	18	13	SP1036	土師器	鉢	(26.0)	(4.3)	-	やや密	不良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ目・ヨコナデ ヨコナデ	全体厚減 胎土:1mm程度の長石・石英・くさり礫・雲母を含む
46	18	13	SP1036	土師器	鉢	(28.0)	(3.5)	-	やや密	良好	灰白色 灰白色	ハケ目・ハラナデ ヨコナデ・ハケ目・ハラナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・くさり礫・角四石を含む
47	18	13	SP1027	土師器	皿	-	1.25	-	やや密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向左 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
48	18	13	SP1027	土師器	皿	(5.6)	0.95	(5.0)	密	良好	黄灰色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロク口回転方向左 内面に黒炭を有す 胎土に0.5mm以下の長石・石英を少量含む
49	18	13	SP1027	土師器	皿	(5.6)	1.1	(4.4)	やや密	良好	浅黄褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫・黒色砂粒を少量含む
50	18	13	SP1027	土師器	皿	(7.2)	0.7	(6.6)	密	良好	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 胎土:0.5mm以下の長石・くさり礫・雲母を少量含む
51	18	13	SP1027	土師器	杯	-	(1.5)	-	密	やや良	にぶい・褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向左 胎土に0.5mm程度の長石・石英・くさり礫・雲母を少量含む
52	18	13	SP1027	土師器	杯	-	(1.55)	-	やや密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向右 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む
53	18	13	SP1027	土師器	杯	-	(1.9)	(8.2)	密	やや良	にぶい黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5mm以下の長石・石英・くさり礫を少量含む
54	18	14	SP2005	青磁	椀	-	(2.0)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:浅灰色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	外面に銀化した黒澤弁文様 龍泉窯(16世紀)
55	18	14	SP2002	磁器	椀	-	(1.5)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:無色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	買入がみられる
56	18	14	SP2006	土師器	鉢小	-	(4.7)	-	密	良好	灰黄褐色 にぶい・褐色	ハケ目後回転ナデ 回転ナデ	遺物番号等同一同一体又は同一器種か 胎土に0.5-2mm程度の長石・石英を少量含む
57	18	14	SP2019	土師器	杯小	-	(1.1)	(6.8)	密	良好	褐灰色 褐灰色	厚減により不明瞭	底部回転赤切り 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を少量含む
58	18	14	SP2021	白磁小	椀	(18.0)	(3.6)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰白色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	全輪 胎土に黒色砂粒を少量含む
59	19	14	1地区 遺構検出	土師器	皿	-	0.85	-	密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り ロク口回転方向右 胎土に0.5mm以下の石英を少量含む
60	19	14	1地区 表土除去	土師器	皿小	-	(1.2)	(6.0)	やや粗	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転赤切り 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫・黒色砂粒を含む
61	19	14	1地区 西長土塚新掘	土師器	杯	-	(1.6)	-	やや密	やや良	浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向左 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を少量含む
62	19	14	1地区 西長土塚新掘	土師器	杯	-	(2.3)	-	やや密	良好	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	ロク口回転方向右 胎土:0.5mm以下の長石・石英・くさり礫を少量含む
63	19	14	1地区 表土除去	瓦葺土器	鍋	-	(5.8)	-	粗	良好	灰白色	ヨコナデ・フツミナデ ヨコナデ・フツミナデ・ヒキヤキ	胎土に0.5-1mm程度の石英を多く含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
64	19	14	1地区 壁面清掃	瓦葺土器	鍋	-	(4.25)	-	粗	良好	灰白色 褐灰色	ハケ目・ヨコナデ・フツミナデ ヨコナデ・フツミナデ・ヒキヤキ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を多く含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
65	19	14	1地区 表土除去	瓦葺土器	火鉢	-	(2.05)	-	やや密	良好	灰白色	ヨコナデ後割りサエ ヨコナデ後割り	1層彫り・波の印文 胎土:0.5-1mm程度の長石・石英・黒色砂粒を少量含む
66	19	14	1地区 壁面清掃	青磁	小壺小	-	(1.5)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰オリーブ色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	買入がみられる 中国産 1層土層位の平山面中央は輪軸跡
67	19	14	1地区 遺構検出	青磁	椀	-	(2.1)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰オリーブ色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	外面に黒化した黒澤弁文様 龍泉窯(15世紀)
68	19	14	1地区 表土除去	青磁	椀	-	(2.5)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:オリーブ灰色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	外面に黒化した黒澤弁文様 龍泉窯(15世紀)
69	19	14	2地区 遺構検出	瓦葺土器	鍋	-	(5.0)	-	やや粗	良好	灰白色 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ・ヨコナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
70	19	14	2地区 遺構検出	瓦葺土器	鍋	-	(3.2)	-	やや密	良好	灰白色	ハケ目後回転ナデ 回転ナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀後半)
71	19	14	2地区 遺構検出	瓦葺土器	火鉢	-	(2.1)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:無色	ヨコナデ 回転ナデ後割り	胎土:0.5-1mm程度の長石・黒色砂粒を少量含む 1層彫りの印文とみられる(鑑定印文径2.2cm)
72	19	15	2地区 遺構検出	青磁	壺	(4.2)	(1.0)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:浅黄色	回転ナデ 不明瞭・輪軸	外面のみ輪軸 買入あり 内面磨削。近世因所か
73	19	15	2地区 遺構検出	青磁	椀	-	(1.6)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:オリーブ灰色	不明瞭・輪軸 回転ナデ後輪軸	ケズリ出し高台 高台内外面・貫付無軸 買入がみられる 龍泉窯(13世紀)
74	19	15	2地区 表土除去	青磁	椀	-	(3.1)	(5.2)	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰オリーブ色	回転ナデ後輪軸 回転ナデ後輪軸	内面見込みにはへっくき文様 ケズリ出し高台 高台内外無軸(異分褐色発色) 龍泉窯(14世紀代)

番号	採国	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
75	19	15	2地区 遺構検出	磁器 (青花)	椀	-	(3.0)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:黄トリーブ灰色	同輪ナデ後焼輪 同輪ナデ後焼輪	外面に残項による文様 内面に貫入あり 器底(15世紀後半-16世紀)
76	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	土師器	杯	-	(1.75)	-	やや密	やや良	褐色 褐色	同輪ナデ 同輪ナデ	ロクロ回転方向左 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を少量含む
77	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	土師器	杯	-	(1.8)	-	やや密	良好	褐色 褐色	同輪ナデ 同輪ナデ	ロクロ回転方向右 胎土に0.5mm以下の長石・石英・くさり礫を含む
78	20	15	3地区 遺構検出	土師器	杯	-	(1.6)	-	やや密	やや良	灰白色 灰白色	同輪ナデ 同輪ナデ	ロクロ回転方向左 胎土に0.5-1mm程度の石英・くさり礫を少量含む
79	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	青磁	椀	(14.3)	(2.2)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰トリーブ色	同輪ナデ後焼輪 同輪ナデ後焼輪	内外面に貫入がみられる 龍泉窯(13世紀)
80	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	土師器	鍋	-	(4.0)	-	粗	やや良	褐色 褐色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を多く含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
81	20	15	3地区 遺構検出	瓦貫土器	鍋	-	(2.7)	-	やや粗	良好	灰白色 灰白色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5-1mm程度の石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
82	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	鍋	-	(4.0)	-	やや密	やや良	灰色 黄灰色	同輪ナデ 摩滅により不明	胎土に0.5-2mm程度の長石・石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
83	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	鍋	-	(2.4)	-	やや粗	良好	黒褐色 黄灰色	ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
84	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	鍋	-	(5.6)	-	やや密	良好	灰白色 黄灰色	同輪ナデ 同輪ナデ	胎土に0.5-2mm程度の長石・石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
85	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	湯 見盛か)	-	(7.1)	-	やや粗	良好	灰色 陶灰色	ハク目・ヨコナデ ハク目・指オサエ・ナテ・ヨコナデ	全体摩滅 外面に保存 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・黒色砂粒を含む 岩崎庵半古型式(15世紀後半-16世紀代)
86	20	15	3地区 遺構検出	瓦貫土器	鍋	-	(3.2)	-	やや粗	良好	褐色 陶灰色	ヨコナデ・ツマミナデ ヨコナデ・ツマミナデ	胎土に0.5-2mm程度の石英を多く含む 岩崎庵半古型式(15世紀後半-16世紀代)
87	20	15	3地区 遺構検出	瓦貫土器	鍋	-	(2.6)	-	粗	良好	灰白色 陶灰色	ハク目・ツマミナデ ツマミナデ・ヨコナデ・指オサエ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を多く含む 岩崎庵半古型式(15世紀後半-16世紀代)
88	20	15	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	鍋	-	(2.75)	-	やや粗	良好	褐色 灰白色	ヨコナデ ヨコナデ・ツマミナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を含む 岩崎庵半古型式(15世紀後半)
89	20	16	3地区 表土除去	瓦貫土器	鍋	(27.6)	(3.9)	-	やや密	良好	褐色 灰白色	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ・指オサエ	胎土に1mm程度の長石・石英・雲母を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
90	20	16	3地区 遺構検出	瓦貫土器	鍋	-	(4.5)	-	やや密	良好	褐色 灰黄褐色	ハク目 ナテ・指オサエ	外面に保存 胎土に0.5-2mm程度の石英を少量含む
91	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	鍋	-	(4.7)	-	やや密	良好	褐色 黄灰色	ハク目 ハク目・ナテ・指オサエ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・黒色砂粒を 少量含む
92	20	16	3地区 表土除去	瓦貫土器	足鍋	-	(6.6)	-	やや密	良好	青灰色 青灰色	指痕による整形	胎土に0.5-2mm程度の長石・石英・黒色砂粒を 少量含む
93	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	足鍋	-	(8.3)	-	粗	良好	灰白色	指痕による整形	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・くさり礫を 多く含む
94	20	16	3地区 表面採集	土師器	羽釜	-	(2.4)	-	やや粗	良好	褐色 褐色	ハク目後ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5-2mm程度の長石・石英・くさり礫を多く含む 14世紀代
95	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	鉢	-	(2.5)	-	やや粗	良好	褐色 褐色	ハク目目・ヨコナデ ヨコナデ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を含む
96	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	土師器	鉢	-	(2.75)	-	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	摩滅により不明	胎土に0.5-4mm程度の長石・石英・角閃石を多 く含む
97	20	16	3地区 表土除去	瓦貫土器	鉢	-	(5.0)	-	やや密	良好	青灰色 灰白色	ハク目 ハク目ヨコナデ・指オサエ・ナテ	胎土に0.5-1mm程度の長石・石英・黒色砂粒を 少量含む
98	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	楕鉢	-	(3.4)	-	粗	良好	褐色 灰白色	ハク目 ハク目ヨコナデ・オロシヨコナデ	胎土に0.5mm以下の長石・石英・黒色砂粒を多 く含む
99	20	16	3地区 遺構検出	瓦貫土器	楕鉢	-	(5.2)	-	粗	良好	灰白色 灰白色	ハク目後オロシ目 ハク目後ヨコナデ	使用により内面オロシ目摩滅 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を多く含む
100	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	瓦貫土器	楕鉢	-	(4.0)	-	やや粗	良好	灰白色 灰白色	オロシ目 ヨコナデ・指オサエ	使用により内面オロシ目摩滅 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を多く含む
101	20	16	3地区 表土除去	陶器	密 (取付)	-	(7.4)	-	密	良好	褐色 灰白色	同輪ナデ 同輪ナデ	備前焼 15-16世紀 耳部磨り付けの指オサエ蓋が内外面に2箇所残る 扉部に2条のハク目記号が刻まれている
102	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	青磁	椀	-	(2.5)	-	密	良好	胎土:灰白色 釉:トリーブ灰色	同輪ナデ後焼輪 同輪ナデ後焼輪	外面に鎔造文様 龍泉窯(13世紀代)
103	20	16	3地区 壁面清掃	青磁	不明	-	(2.3)	(6.8)	密	良好	胎土:灰白色 釉:灰トリーブ色	同輪ナデ後焼輪 同輪ナデ後焼輪	内外面焼輪 中国産
104	20	16	4地区 表面採集	瓦貫土器	鍋	-	(4.5)	-	密	良好	褐色 暗褐色	同輪ナデ 同輪ナテ・指オサエ後ナテ	外面に保存 胎土に0.5-1mm程度の長石・石英を含む 岩崎庵半古型式(15世紀前半-中頃)
105	20	16	4地区 遺構検出	白磁	皿か	-	(1.2)	(3.6)	密	良好	胎土:灰白色 釉:無色	同輪ナデ後焼輪 ケズリ出し後焼輪	磁器産 明代昌武窯に似る 15世紀代
106	20	16	4地区 壁面清掃	磁器	椀	-	(2.2)	-	密	良好	灰白色 灰白色	同輪ナデ後焼輪 同輪ナデ後焼輪	近世国産か 外面に暗緑灰色の鉄須で染付文様あり

※岩崎庵半 岩崎仁志 1999 「足編再考」『陶研』第12号 財団法人山口県教育財団山口県歴史文化センター

石器観察一覧表

番号	採国	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	色調	調整・備考	
					長さ	幅	厚さ				
107	20	16	3地区 西端客土掘り下げ	石器	石蕨	3.25	1.35	0.4	1.9	灰色	サマカイト製

金属関連品観察一覧表

番号	採国	出土場所	種類	法量 (cm)			重量 (g)	備考	
				長さ	幅	厚さ			
108	16	SK101	鍔洋	2.5-5.6	2.0-4.5	1.3-2.3	4.8-52.0	褐色	自然科学分析により、鉄関連の極形鍛冶洋で、 鍛錬造法により生じたものと鑑定

Ⅳ 自然科学分析

1 殿久遺跡におけるAMS法による放射性炭素年代測定

株式会社加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

殿久遺跡は、山口県美祿市伊佐町伊佐字殿久に所在し、南から北側に張り出す標高約200mの山麓丘陵に立地する。測定対象試料は、土坑と柱穴から出土した炭化材の合計5点である（第7表）。

SK101は炭化物と鉄滓の廃棄土坑、SB104-6、SB305-2、SB313-10、SB315-3は掘立柱建物を構成する柱穴である。周辺の遺構や遺物の状況から、時期は室町時代（14～16世紀）と推定されている。

(2) 測定の意義

試料が出土した遺構周辺の遺構や遺物の状況から時期を推定しているが、年代測定を実施することにより、さらに精度の高い年代推定を行う。

(3) 化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ②酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と第7表に記載する。
- ③試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- ④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- ⑥グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシウウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第7表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ②¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第7表に、補正していない値を参考値として第8表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がそ

の誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ③pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第7表に、補正していない値を参考値として第8表に示した。
- ④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第8表に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を第7、8表に示す。

土坑SK101出土試料1の¹⁴C年代は $1020 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は995 ~ 1024cal ADの範囲で示され、推定される時期よりかなり古い値となった。

柱穴出土試料4点の¹⁴C年代は、 $590 \pm 20\text{yrBP}$ (試料2)から $260 \pm 20\text{yrBP}$ (試料3)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料2が1316 ~ 1400cal ADの間に2つの範囲、最も新しい試料3が1640 ~ 1791cal ADの間に2つの範囲で示される。試料2、4、5の値は推定される時期と重なる。試料3は、上述の 1σ 暦年代範囲で見ると推定される時期より新しいが、 2σ 暦年代範囲で見ると、確率は高くはないものの、推定される時期に重なる範囲がある。なお、試料3の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(第8表下の警告参照)。

試料の炭素含有率は、すべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第7表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-152226	試料1	1地区 炭化物廃棄土坑 (SK101) 埋土上層	炭化材	AAA	-26.63 ± 0.25	1020 ± 20	88.08 ± 0.24
IAAA-152227	試料2	1地区 掘立柱建物の柱穴 (SB1046) 埋土	炭化材	AAA	-29.02 ± 0.29	590 ± 20	92.91 ± 0.26
IAAA-152228	試料3	3地区 掘立柱建物の柱穴 (SB3052) 埋土	炭化材	AAA	-28.37 ± 0.31	260 ± 20	96.83 ± 0.26
IAAA-152229	試料4	3地区 掘立柱建物の柱穴 (SB31340) 埋土	炭化材	AaA	-26.59 ± 0.28	360 ± 20	95.60 ± 0.25
IAAA-152230	試料5	3地区 掘立柱建物の柱穴 (SB3153) 埋土	炭化材	AAA	-26.30 ± 0.23	330 ± 20	95.98 ± 0.25

第8表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-152226	1050 ± 20	87.79 ± 0.23	1019 ± 21	995calAD - 1024calAD (68.2%)	986calAD - 1033calAD (95.4%)
IAAA-152227	660 ± 20	92.15 ± 0.25	591 ± 22	1316calAD - 1355calAD (53.8%) 1389calAD - 1400calAD (14.4%)	1303calAD - 1367calAD (70.0%) 1382calAD - 1410calAD (25.4%)
IAAA-152228	310 ± 20	96.17 ± 0.25	258 ± 21	1640calAD - 1665calAD (66.0%)* 1789calAD - 1791calAD (2.2%)*	1528calAD - 1551calAD (8.9%)* 1633calAD - 1668calAD (76.0%)* 1782calAD - 1798calAD (10.5%)*
IAAA-152229	390 ± 20	95.29 ± 0.24	361 ± 20	1469calAD - 1519calAD (44.4%) 1593calAD - 1619calAD (23.8%)	1455calAD - 1524calAD (53.0%) 1558calAD - 1632calAD (42.4%)
IAAA-152230	350 ± 20	95.72 ± 0.25	329 ± 21	1513calAD - 1529calAD (11.6%) 1543calAD - 1601calAD (43.2%) 1617calAD - 1634calAD (13.5%)	1488calAD - 1604calAD (75.8%) 1609calAD - 1641calAD (19.6%)

[参考値]

* Warning! Date may extend out of range

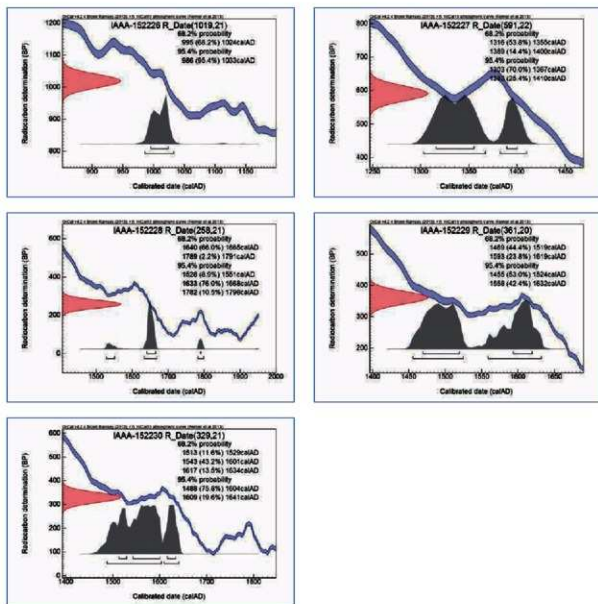
(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



第 21 図 暦年較正年代グラフ

2 殿久遺跡出土鉍滓の分析調査

日鉄住金テクノロジー株式会社

大澤正己・鈴木瑞穂

(1) いきさつ

殿久遺跡は山口県美祿市伊佐町に所在する。発掘調査地区の中世（14～16世紀代中心）と推定される土坑（SK101）から、炭に混じって複数の鉍滓が出土している。これらがどのような作業に伴う遺物か検討するため、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

供試材

第9表に示す。出土鉄滓1点の調査を行った。

調査項目

①肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

②マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を低倍率で撮影したものを指す。広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

③顕微鏡組織

鉍滓の鉍物組成や金属組織観察などを目的とする。試料断面の観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

④EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

（日本電子株式会社JXA-8800RL 波長分散型5チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径 $3 \mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

⑤化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素（ SiO_2 ）、酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）、酸化カルシウム（ CaO ）、酸化マグネシウム（ MgO ）、酸化カリウム（ K_2O ）、酸化ナトリウム（ Na_2O ）、酸化マンガン（ MnO ）、二酸化チタン（ TiO_2 ）、酸化クロム（ Cr_2O_3 ）、五酸化燐（ P_2O_5 ）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

TON-1：梶形鍛冶滓

- ①肉眼観察：ほぼ完形の塊形鍛冶滓（274.8g）である。上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しい。表面には広い範囲で茶褐色の銹化物が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で、着磁性はごく弱い。表面の気孔は少なく、重量感のある滓である。
- ②マクロ組織：第22図①に示す。上側および左下の明灰色部は鍛冶滓である。中央の黒色部は微細な木炭破片で、内部に発達した導管が分布することから、広葉樹材と推定される。また右下の不定形青灰色部は銹化鉄である。
- ③顕微鏡組織：第22図②③に示す。②は滓部の拡大で、白色粒状結晶ウスタイト、微細な暗灰色結晶ヘルシナイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。また中央は微細な金属鉄粒である。3%ナイトルで腐食したところ、ほぼ全面パーライト（Peralite）組織の共析鋼（C:0.77%）であった。③は遺物表面に付着した、微細な粒状滓^(注1)の拡大である。滓中には灰褐色多角形結晶マグネタイト（Magnetite：FeO・Fe₂O₃）が晶出する。
- ④EPMA調査：第22図④に滓部（第22図②と同一視野）反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶の定量分析値は97.1%FeO-1.0%TiO₂（分析点1）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。微細な暗灰色結晶の定量分析値は49.1%FeO-50.6%Al₂O₃（分析点2）で、ヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al₂O₃）、淡灰色柱状結晶の定量分析値は69.9%FeO-30.2%SiO₂（分析点3）で、ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）に同定される。また素地部分の定量分析値は40.7%SiO₂-22.7%Al₂O₃-8.8%CaO-8.5%K₂O-1.3%Na₂O-17.1%FeO-3.3%TiO₂（分析点4）であった。非晶質硅酸塩である。中央の微小白色部の定量分析値は98.2%Fe（分析点5）で、金属鉄（Metallic Fe）である。
- ⑤化学組成分析：第10表に示す。全鉄分（Total Fe）は58.75%と高い割合を示す。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.11%、酸化第1鉄（FeO）が60.95%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）16.11%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は18.95%とやや低めで、塩基性成分（CaO+MgO）も0.73%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は0.19%、バナジウム（V）が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）0.08%、銅（Cu）も<0.01%と低値である。

（4）まとめ

殿久遺跡出土鉄滓（TON-1）は鉄酸化物主体で、製鉄原料の脈石成分（TiO₂、V）は低減傾向が著しい（以下、第11表参照）。鍛冶原料の鉄素材の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。遺物表面に熱間での鍛打作業に伴う微細遺物（粒状滓）が付着するもの、これを裏付ける特徴といえる。また滓中に噛み込まれた木炭破片から、広葉樹材を鍛冶炭に用いていたことも明らかとなった。

（注）

- （1）粒状滓は熱間での鍛冶作業において、鉄素材の突起部が酸化して溶け落ちる。また鍛打の際、酸化防止を目的に塗布された粘土が酸化膜と反応して飛散した、微細な球状の遺物である。

第9表 供試材の履歴と調査項目

符号	道跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目							備考	
					大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度		カロリー
TON-1	殿久	1地区 SK101	梶形鍛冶滓	中世	113.6×81.1×48.6	274.8	なし	○	○			○	○			

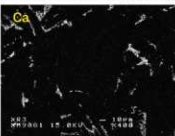
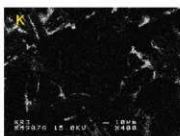
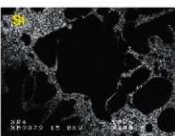
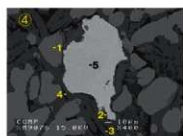
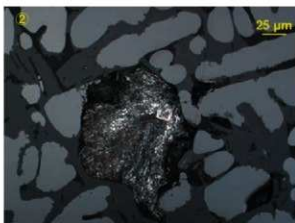
第10表 供試材の化学組成

符号	道跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	化学組成 (%)																										
					全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	砒素 (As)	錫 (Sn)	鉛 (Pb)	亜鉛 (Zn)	アンチモン (Sb)	TiO ₂ / Total Fe	造滓成分 / Total Fe		
TON-1	殿久	1地区 SK101	梶形鍛冶滓	中世	58.75	0.11	60.95	16.11	13.48	4.18	0.47	0.26	0.48	0.08	0.08	0.19	0.03	0.032	0.11	0.36	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	18.95	0.32	0.003

第11表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	道跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)							所見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分		Cu
TON-1	殿久	1地区 SK101	梶形鍛冶滓	中世	洋滓・W+H+F、微小金属鉄粒、木炭炭片・広葉樹材、粒状洋M	58.75	16.11	0.73	0.19	<0.01	0.08	18.95	<0.01	鍛錬鍛冶滓(主に鉄素材の吹き減り酸化に伴う損失)による反応副産物

W: Wustite (FeO)、M: Magnetite (FeO・Fe₂O₃)、H: Hercynite (FeO・Al₂O₃)、F: Fayalite (2FeO・SiO₂)



定量分析値					
Element	1	2	3	4	
Na ₂ O	0.066	—	—	1.332	
MgO	0.050	0.062	0.571	—	
Al ₂ O ₃	0.321	50.565	0.167	22.702	
SiO ₂	0.020	0.053	30.201	40.661	
P ₂ O ₅	—	—	—	0.310	
S	0.007	0.008	0.004	0.116	
K ₂ O	0.024	0.008	0.064	8.522	
CaO	—	—	0.319	8.822	
TiO ₂	1.014	0.352	1.868	3.329	
Cr ₂ O ₃	—	—	—	—	
MnO	0.019	0.070	0.123	0.104	
FeO	97.072	49.043	69.866	17.149	
ZnO	0.003	—	0.019	0.038	
Total	98.596	100.161	103.202	103.085	
Element					
Element	5				
O	0.032				
P	0.015				
S	0.005				
Fe	98.155				
Zn	0.144				
Sn	0.075				
Ag	0.052				
Total	98.478				

滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第 22 図 梘形鍛冶滓の顕微鏡組織

V 総括

1 調査成果の概要

殿久遺跡での発掘調査の結果、中世の室町時代、14世紀頃から始まり15～16世紀代を中心に営まれたと推定される集落跡が確認された。検出された主な遺構は、掘立柱建物21棟、土坑5基、溝6条、柱穴513個（掘立柱建物構成柱穴を含む）である。後世の削平により点数は多くはないが、出土した主な遺物は、14～16世紀代の土師器（皿・杯・鍋・足鍋・羽釜・鉢）、瓦質土器（鍋・足鍋・播鉢・鉢・火鉢）、備前焼陶器（壺）、13～16世紀代の中国産輸入磁器（青磁・白磁・青花）等である。縄文時代の石鏝も出土し、中山間地としての立地環境に適応した人びとの生活の形跡が明らかになった。

2 遺構について

(1) 自然地形と遺構の残存状況（第12表）

遺跡は、伊佐川に面し、山麓から北東側に張り出す標高約200mの丘陵上に立地する。発掘調査地区で一定数の遺構が確認されたが、丘陵頂部の削平が著しく、元々は遺構が所在したと推定される1・3地区の中央部付近では検出されなかった（第5図）。掘立柱建物の構成柱穴平均深度は、1地区西側調査区23.9cm（34個）、3地区西側調査区26.9cm（59個）、3地区東側調査区17.7cm（51個）である。遺構番号（SB・SP）を付けた柱穴全体の平均深度は23.6cm（203個）となる（第12表）。集落が営まれた当時の想定される建物の柱穴深度よりもかなり浅く、近世以降と推定される耕作地造成時の大規模な削平により、本来所在した遺構が多く消失した状況が統計上の数値からも裏づけられる。

第12表 柱穴の地区別平均深度一覧表

地区	1地区		2地区	3地区		
	西側調査区	東側調査区		西側調査区	東側調査区	
掘立柱建物構成柱穴	23.9 (34個)	(0個)		26.9 (59個)	17.7 (51個)	
平均深度 (cm)	SP番号のある柱穴 ※1	27.6 (21個)	17.1 (12個)	22.3 (5個)	31.9 (11個)	23.5 (10個)
	地区別	23.8 (67個)		22.3 (5個)		23.5 (131個)
	全体 ※2			23.6 (203個)		

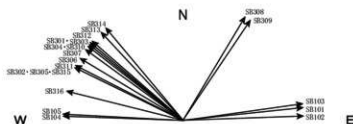
※1 遺物や礎石などを伴い、SP番号を付与した柱穴

※2 地区別平均をもとに算出

(2) 掘立柱建物と関連遺構

①棟方向と建物の配置（第23図）

調査区内で掘立柱建物は、21棟検出された。棟方向について、1・3地区での分布状況を第23図に示した。①北西方向（SB104～SB314、16棟）、②東方向（SB102～SB103、3棟）が主体をなす。このほか、やや向きの異なる北東方向の2棟（SB308・SB309）がある。①・②は、東西軸に対して、棟方向が北西か北東方向に振れるかの違いであり、掘立柱建物の大部分は、基本的には東西方向に細長い建物である。また、北東に延びる緩斜面の丘陵主軸線に直交するように長く建物の棟方向を取り、段差が少ないように建てられている。丘陵下の伊佐川や谷底平野、推定される当時の道路を見下ろす棟方向でもある。3地区



第23図 掘立柱建物の棟方向分布図

東側・西側調査区では、建物の重複があり、柱穴の密集度も高いことから、東西方向の基本的棟方向は継承し、建て替えを行いながら中世に継続的に集落が営まれたことがうかがわれる。

②建物の規模

掘立柱建物の規模については、3間×2間（1棟）、3間×1間（1棟）、2間×2間（9棟）、2間×1間（8棟）、1間×1間（2棟）となる（第1表）。床面積が10～20㎡程度の小規模な建物が主体をなす。10㎡未満の小規模な建物は、作業小屋・納屋・御堂など居住以外の用途で建てられたと考えられる。SB105・315は小・中規模の総柱建物で倉庫などに使用されたものか。床面積が25㎡を超えるSB316などの当遺跡では比較的規模の大きい建物は、住居として使用されたと推察される。

③溝との関係

1地区の東側でSD101、西側でSD102、3地区東側でSD302・SD303が、それぞれ丘陵縁辺に沿って南側から北側方向に流れている。出土遺物（31・32・33）からも掘立柱建物と同じ時期に相当し、掘立柱建物の所在する集落範囲を区画する機能や排水機能のために設けられた溝と考えられる。

(3) 土坑

1地区SK101で、炭化物とともに鉄滓が出土した。床面に灰跡の焼け縮まりの痕跡はなく、廃棄土坑と考えられる。鉄滓分析の結果、椀形鍛冶滓で、鍛冶原料の鉄素材の吹き減りで生じた鍛錬鍛冶滓と鑑定された。集落内で、小規模な鍛冶作業が行われたと推定される。ただし、出土炭化物（試料1）の放射性炭素年代測定（AMS）の結果、暦年較正年代は995～1024cal AD（10～11世紀代）の範囲となる。SK101出土の土師器皿（25）や周辺の遺構からの出土遺物の時期（13～16世紀代）よりも古く、自然科学分析の年代との整合性については、周辺の遺跡を含めて、今後の検討を要する。

3 遺物について（第24図）

主要遺物の種類や時期について第24図に概要を示す。土師器皿・杯は少量で破片が多く、時期を判断できる完形品や良好な出土状況の資料は限定的であった。土師器杯は、器壁はやや厚くわずかに内湾して器高が高いもの（30）から器壁が薄く器高が低いものに至る14世紀から15・16世紀代を中心とする時期と見られる（第24図の土師器皿・杯は遺構出土品をセットで配置したもので、時期変遷をそのまま示すものではない）。高台付の土師器椀やその退化型式の時期のものは出土しなかった。

時期判断の主な資料は、瓦質土器鍋・足鍋や中国産輸入磁器である。鍋・足鍋は15世紀前半から16世紀末までの時期（岩崎編年⁽¹¹⁾Ⅲ古・Ⅲ新・Ⅳ型式）が主体をなす。なお、羽釜の鈔部破片（94）は、14世紀代に比定されよう。瓦質土器挿鉢（23）・鉢・火鉢⁽¹²⁾（65・71）や陶器の備前焼⁽¹³⁾（18・101）も15～16世紀代と見られる。中国産輸入磁器では、龍泉窯系の青磁⁽¹⁴⁾が主体で、蓮運弁文様の椀（39・102ほか、13世紀代）、見込みにヘラ描き文様がある椀（74ほか、14世紀代）、線描蓮弁文様のある椀（54・68ほか、15世紀末～16世紀代）がある。碁笥底の白磁皿（105、15世紀代）、景德鎮の青花（染付）椀⁽¹⁵⁾（75、15世紀終～16世紀代）も出土した。

調理・煮炊・食事に関わる日用の土器類に対して、高級品である中国産輸入磁器（青磁・白磁・青花）が一定数量出土していることは、当遺跡のひとつの特徴である。

遺物 時代	皿・杯 (土師器)	羽釜・鍋・足織 (瓦質土器・土師器)	播鉢・鉢・火鉢 (瓦質土器・土師器)	壺 (備前焼陶器)	碗 (中国産青磁)	皿・碗 (中国産青磁)
鎌倉時代 13世紀						
14世紀	5000					
室町時代 15世紀	SR104, SR101					
16世紀	SP107, SP105					

第24図 主要出土遺物の時期変遷図



4 遺跡を特徴づける立地環境 (第25図)

調査区の丘陵の広さや建物の規模・構造からは、大規模な中世集落の存在は想定されない。しかし、調査地区付近は、中世の周防・長門地域（山口県域）を支配した守護大名大内氏の重臣で、長門守護代を務めた内藤隆春の居城であった荒滝山城⁽¹⁶⁾（標高459m、16世紀後半代中心）への美祢側出入り口に当たる（第25図）。加えて、美祢地域と田原郡域（宇部市）の吉部盆地の集落とを結ぶ交通路の中間点であり、峠越え道路の美祢側出入り口の関所的機能を果たす立地環境を反映した集落が営まれていた可能性が推定される（図版2-1）。

また、殿久遺跡は、内藤氏の居城・荒滝山城に近く、それを取り巻くように周辺に立地する大内氏や内藤氏の家臣に関わると思われる山城^(16, 17)（太郎丸城跡・次郎丸城跡・埴生山城跡・信田ノ丸城跡・藤ヶ瀬城跡・伊佐城跡など）（第25図）との位置関係からも軍事的に意味を持つ立地環境にあり、武家勢力との関連性を有する集落としての性格を持っていた可能性も考えられる。中世において、生産基盤となる耕地を十分に確保するほどの平野部面積がない当地では、農業経営収入による高い経済力は想定しにくい。こうした中で、高級品の中国産輸入磁器が日用品の土師器・瓦質土器等とともに一定数量出土している点からは、一般農村集落とは異なり、武家勢力との関連を持つなどの社会的地位を反映したある程度の有力富裕者の存在をうかがわせる。



1 殿久遺跡 2 上領遺跡 3 平城遺跡 4 下村遺跡 5 万倉地遺跡 (原館)
6 野水市遺跡 7 藤ヶ瀬遺跡 8 下市遺跡 9 上原田遺跡

第25図 殿久遺跡の立地環境（中世の山城と居館・集落）

なお、殿久遺跡とは伊佐川を挟んで対岸に位置する北側の高台には、地元で「とんぼ」と呼ばれる門名が残っている。地元の言い伝えでは、「留め場」の意味で「関所」的な機能を果たした施設があったのではないかと推測されている。また、遺跡名の元となった字名の「殿久」についても、後世の当て字等も含めて由来は詳らかではないが、有力者層が所在したことを反映している可能性もある。

さらに、美祿側から峠を越えた荒滝山城の吉部側山麓には、今小野、荒滝、犬ヶ迫などの城主・内藤氏の家臣団の屋敷地や関連集落と見られる地域が点在する。室町時代の15～16世紀代には、吉部盆地では且ヶ原遺跡^(注8)・下市遺跡^(注9)・上原田遺跡^(注10)で集落跡の所在が確認されており、山間部の峠付近に立地する殿久遺跡を経由して、美祿地域の集落との交流が行われたものと考えられる。

以上のような中世・室町時代の社会情勢を反映した関所の・軍事的な立地環境が、中山間地域の比較的狭い丘陵部に立地しながらも、一定の密度での遺構の広がりや高級な中国産輸入磁器を一定数量含む出土遺物構成を示す当遺跡の特徴を生み出した重要な社会的要因であったと推測される。

5 おわりに

戦国時代（室町時代後期）を経て、大内氏勢力から毛利氏の支配に移り変わると、当遺跡地が持っていた地理的・軍事的な立地環境の優位性を反映した集落の機能が失われていった。近世（江戸時代）に入ると、毛利氏による新田開発政策を背景に領域内各地で耕作地の造成が推進された。その結果、遺跡が立地した山麓傾斜面の丘陵を削平し谷筋を埋めて石垣を築き、棚田状に耕地を開発することによって生み出されたのが、発掘調査前の耕作地としての当地域の土地景観であった。

古代から栄えた美祿中心地域（大嶺盆地周辺）から離れた伊佐川上流の中山間部に位置する地域における今回の初めての本格的発掘調査により、歴史的資料や情報の少なかったこうした山間地域での中世集落の特徴や実態に関する新たな知見を得ることができた。今回の調査成果も踏まえ、今後、こうした発掘調査を通じて、美祿市域及び山口県内における中山間部を含めた地域の歴史が、より一層具体的かつ総合的に理解されていくことが期待される。

[注・参考文献]

- 注1 岩崎仁志 1999「足鍋再考」『陶垣』第12号 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター
岩崎仁志 2007「山陽西部における中世の土製煮炊具 一周防・長門を中心に」『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 注2 藤原彰久 2005「山口県内出土の壺形火鉢について」『陶垣』第18号 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター
- 注3 重根弘和 2003「中世備前焼に関する考察－形態と変遷と年代について－」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会
- 注4 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 注5 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 注6 宇部市教育委員会 2005「荒滝山城跡」宇部市埋蔵文化財調査報告 第1集
- 注7 美祿市史編集委員会 1982「美祿市史」美祿市
- 注8 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1996「且ヶ原遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告 第181集 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会
- 注9 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1994「下市遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告 第169集 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会
- 注10 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1995「上原田遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告 第176集 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会

圖 版



調査区遠景（西から）

図版 2



1 調査区遠景（西から）



2 調査区遠景（北から）



1 調査区全景 (上が北)



2 1地区全景



3 2地区全景



4 3地区全景

図版 4



1 1地区東側調査区状況（東から）



2 1地区西側調査区状況（西から）



3 1地区東側調査区南壁土層断面状況（北西から）



4 1地区西側調査区北壁土層断面状況（西から）



5 2地区東側調査区状況（東から）



6 2地区西側調査区状況（西から）



7 2地区中央トレンチ土層断面状況（南西から）



8 2地区西側調査区南壁土層断面状況（北東から）



1 3地区東側調査区状況（東から）



2 3地区西側調査区状況（西から）



3 3地区東側調査区東壁土層断面状況（北西から）



4 3地区西側調査区西壁土層断面状況（東から）



5 4地区南側調査区状況（南から）



6 4地区南側調査区東壁土層断面状況（西から）



7 4地区中央調査区東壁土層断面状況（西から）

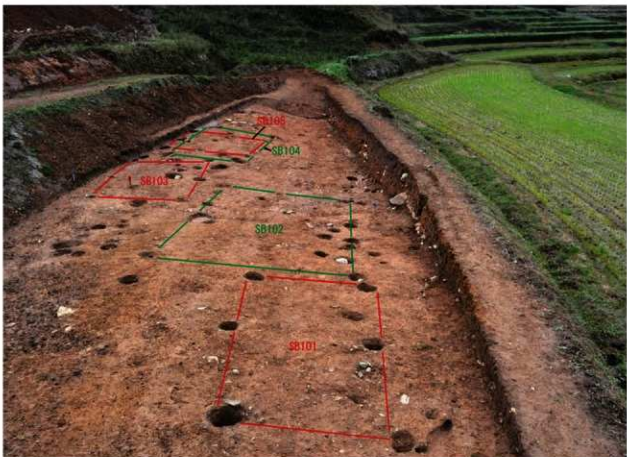


8 4地区北側東壁土層断面状況（西から）

図版 6



1 1地区西側調査区掘立柱建物群（上空から）



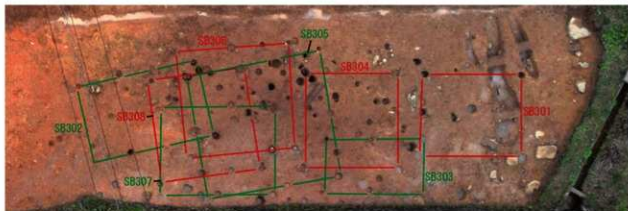
2 1地区西側調査区掘立柱建物群（東から）



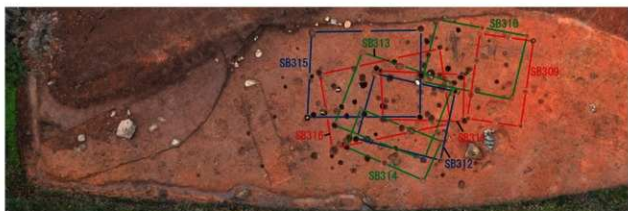
3 1地区西側調査区 SB102-7 遺物出土状況（東から）



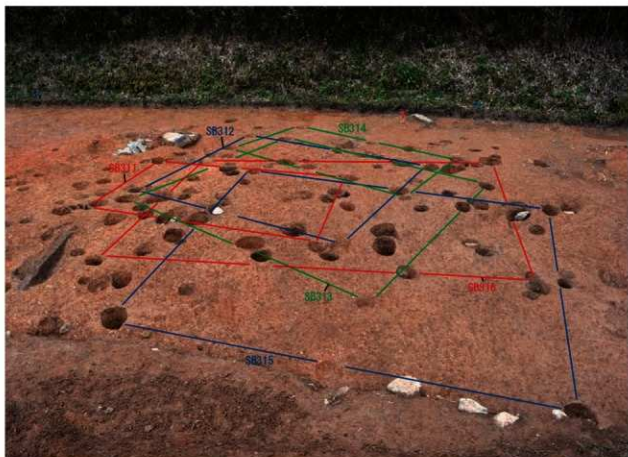
4 1地区西側調査区 SB105-3 石出土状況（北から）



1 3地区東側調査区掘立柱建物群（上空から）



2 3地区西側調査区掘立柱建物群（上空から）



3 3地区西側調査区掘立柱建物群（北から）

図版 8



1 3地区東側調査区 SB304-2 遺物出土状況(東から)



2 3地区東側調査区 SB305-2 遺物・石出土状況(北から)



3 3地区東側調査区 SB307-7 石出土状況(東から)



4 3地区西側調査区 SB309-1 石出土状況(西から)



5 3地区西側調査区 SB314-4 遺物出土状況(西から)



6 3地区西側調査区 SB311-2 石出土状況(東から)



7 3地区西側調査区 SB311-5 遺物出土状況(西から)



8 3地区西側調査区 SB316-5 石出土状況(西から)



1 1地区西側調査区土坑(SK101)検出状況(東から)



2 1地区西側調査区土坑(SK101)土層断面状況(東から)



3 3地区東側調査区土坑(SK301)土層断面状況(南から)



4 3地区東側調査区土坑(SK302)遺物出土状況(北から)



5 3地区西側調査区土坑(SK303)土層断面状況(東から)



6 3地区西側調査区土坑(SK304)土層断面状況(東から)



7 1地区東側調査区溝(SD101)土層断面状況(南西から)



8 1地区西側調査区溝(SD102)土層断面状況(北から)

図版 10



1 3地区東側調査区溝 (SD302) 土層断面状況 (南から)



2 3地区東側調査区溝 (SD302・SD303) 完掘状況 (南から)



3 1地区東側調査区柱穴 (SP1005) 遺物・石出土状況 (南から)



4 1地区西側調査区柱穴 (SP1021) 石出土状況 (北から)



5 1地区西側調査区柱穴 (SP1026) 遺物出土状況 (東から)



6 1地区西側調査区柱穴 (SP1033) 石出土状況 (東から)



7 1地区西側調査区柱穴 (SP1008) 石出土状況 (北から)

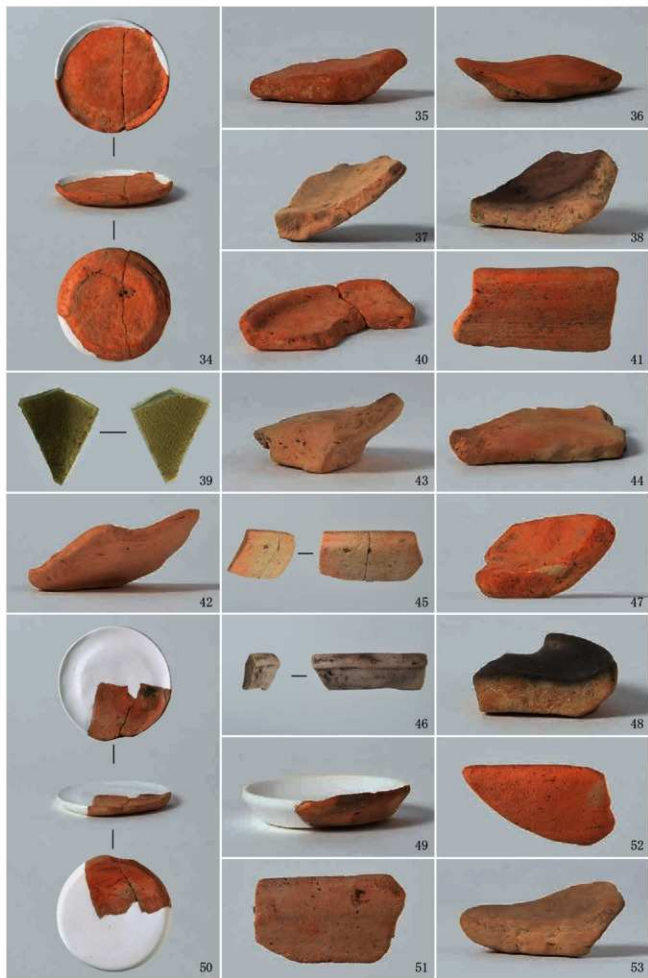


8 3地区東側調査区柱穴 (SP3021) 遺物出土状況 (西から)



出土遺物①





出土遺物③





出土遺物⑤



出土遺物⑥

報告書抄録

ふりがな	とのおきゅういせき
書名	殿久遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第94集
編集著者名	上山佳彦 水津亜希子 河村美沙
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2016年3月25日（平成28年3月25日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とのおきゅういせき 殿久遺跡	やまぐちけん 山口県 美祿市 伊佐町 伊佐 字殿久	352136		34° 09' 05"	131° 15' 47"	20151002) 20151228	1,350㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
殿久遺跡	集落	中世	掘立柱建物 土坑 溝 柱穴	21棟 5基 6条 513個 土師器 瓦質土器 国産陶磁器 中国産輸入磁器 石鏝 等	山間地の狭い丘陵地に所在する小規模な集落でありながら、希少な中国産輸入磁器が一定数量出土した。

要約	<p>殿久遺跡は、美祿市城南東の中山間地に位置し、伊佐川に面して北東に延びる標高約200mの丘陵上に立地する中世（室町時代）の集落跡で、調査により掘立柱建物・土坑・溝・柱穴などの生活痕跡を示す遺構が確認された。中世の土師器・瓦質土器・陶器等が出土するとともに、規模が大きいとはいえない山間地の集落において、中国からの輸入磁器（青磁・白磁・青花）が、一定数量出土したことは、当遺跡の一つの特徴である。</p> <p>遺跡の所在する場所は、有力守護大名の大内氏の家臣であった内藤氏が拠点とした荒滝山城に隣接し、周辺には中世山城が点在するという軍事的要件や、美祿市域と宇部市域とを山間地越えて結ぶ交通路上の関所的要件を兼ね備えていた。この立地環境が、特徴的な山間集落の形成をもたらした一因と推測される。</p> <p>また、石鏝が出土し、縄文時代に狩猟に関わる場所としての活動が営まれたことも確認された。美祿市内での当該地域における初めての本格的発掘調査であり、歴史的資料や情報の少なかった山間地域での中世の集落遺跡に関する新たな知見を得ることができた。</p>
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第94集

殿久遺跡

2016年3月25日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927 山口県下関市長府扇町9番50号